

---

# 皇子クシ

yamayuri

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

皇子クシ

### 【Nコード】

N5493W

### 【作者名】

yamayuri

### 【あらすじ】

人々に神童として知られる、ときの皇帝の三男クシは、父王から疎まれ、異母兄から妬まれ、陰謀に巻き込まれていく。しかしその試練が彼に強さを与える。やがて国は大きな危機を迎え……。

『インカ』の伝承のなかの英雄クシ。彼の武勇伝に最強の女戦士との恋や不思議な部族との出会いを絡めて新しい歴史ファンタジーを創りました。あくまで創作です。

前作『稲妻と星の花』へと続いていくエピソード1になります。

独立した話として読んでいただけます。  
他サイトで公開中のものです。

## 1、神童

奪って豊かになるのではなく、

与えて豊かになるのだ。

## 1、神童

山の上に並んだ若者たちは、強い風に煽られて今にも転げ落ちそうだ。まだ華奢な少年たちは歯を食いしばり、こぶしを握って足を踏ん張り一様に天を仰いでいる。突風が吹くとよろよろとよろめく少年が何人もいた。

しかしその様なことでは、これから行われる過酷な儀式にはとても生き残ることはできないだろう。ふもとで見守る民衆たちには、頂上の人影が点のようであっても、最初に脱落するのが誰かその時点でおおよそ見極めることができた。

その山は都を取り囲む山々の中でも特に険しい急斜面を要しており、剥き出しの山肌には砂のように細かい石粒から拳大ほどの石が無数に転がり一面を覆っている。無造作に踏み出せば足を取られて転げ、垂直にも思える斜面を一気に麓まで転がっていくだろう。そ

うなれば軽い怪我では済むまい。

ただでさえ危険な場所にも関わらず、さらに悪条件を加えるかのようにその日は朝から突風が吹き荒れていた。風は雲を驚く速さで押し流していく。雲が切れれば真夏の太陽が顔を出し、遮るものがない山の頂上に立つ少年たちの肌を灼熱の光で炙った。

それでも山の上の少年たちにその場を逃げ出すことは赦されなかった。使命を全うするか、大怪我を負って最悪の場合は命を失って棄権するか、どちらかの選択しかなかった。

今年は二十人の少年が山の上に揃った。

頭に巻きつけたロープにはそれぞれ、色や形の違う鳥の羽が挿しであり、その羽で誰かが分かるようになっていた。上半身は裸で腰布を巻いただけの姿。足には何も履いてはならなかった。

突然轟音とともに今までにない突風が頂上を吹きぬけた。

かろうじて踏ん張っていた足が一気に掬われる。耐え切れずに八人の少年が山の上から転がり落ちていった。

と同時にほら貝の低い音が山を突き上げるように響いた。それを合図に、残った十二人の少年は一斉に山を駆け下り始めた。岩だらけの急斜面はゆっくり下るだけでも至難の業だ。

駆け出した途端に足を滑らせて三人が転倒した。転倒したひとりとは石ころとともに勢いよく転がって、正面に突き出した大岩に体を打ちつけ、動かなくなってしまうた。残りの二人はそのまま麓まで転げ落ちていった。

九人の少年が広がってようやく山裾近くまでに下りてきたとき、そこに待ち構えていた数人の兵士が思い切り棍棒を振った。加速度は最高潮に達している。勢いの止まらない少年たちは、武器を振り回す兵士たちの中に次々と飛び込んでいった。

避けることも儘ならず華奢な体が次々とはじき飛ばされた。防ぐ

物のない裸体に受ける衝撃は大変なものだ。叩かれて動けなくなつた者もいれば、はじかれても立ち上がつてまた走り出す者もいる。中にはうまく棍棒をすり抜けて走り続ける者もいた。

残る少年の数は五人になっていた。しかしその少年たちをさらに試練が襲う。正面から男たちが石や槍を投げて襲つたのだ。この男たちは何と少年たちの親や親類なのだ。この時点でまた何人かが倒れて脱落した。

試練をくぐり抜けてゴールの旗の下にたどり着いたのは、たった二人だった。真っ赤な鳥の羽根を付けた背の高い少年と真っ白な羽根を付けた華奢な少年。とくに白い羽の少年はまったくの無傷で、傷を負いながらやつとのことでゴールした赤い羽根の少年に大きく差をつけて、一番に旗の柄を掴んでいた。

人々はこの少年たちの勇姿に惜しめない歓声を送った。そのうち多くの民衆が彼らの周りに集まつてきた。兵士たちに守られるようにして、ふたりの少年は民衆の間をすり抜け、広間に設けられた壇の上上がった。彼らには勇者の印のコカの葉の冠が授けられた。コカの葉は、この都のように標高の高い土地に暮らす人々には無くてはならない気付け薬である。その命の元となる葉は勇者のしるしでもあるのだ。そして一人前の大人が身につける禪ふんじが与えられる。彼らはこれで大人の仲間入りをしたのだ。

このふたりは身分は違うが貴族の出身であつた。彼らは少し緊張した面持ちで貴族の少年にだけ行われる次の儀式を待った。

立派な羽冠を抱いた神官がゆつくりと壇上に上がってきた。

神官はまず赤い羽根の少年に近づき、彼の頭頂を鷲掴みにしてぐいっと横にした。赤い羽根の少年は苦痛の表情を浮かべている。頭

を掴まれたからではない。次の痛みには耐えられるかどうか心配なのだ。神官は少年の右の耳たぶを掴んで引っ張る。容赦なく伸ばされたそこに一気に黄金のキリを刺し込んだ。キリを二、三度回転させて穴を広げると、傍に侍る召使いが手渡した小さな金の丸板をその穴にぐいぐいと押し込んだ。

赤い羽根の少年はひどく顔を歪めて唇を噛み締め、なんとか声を出さないように耐えている。右に続いて左にも同じことが行われている間、さすがに小さな呻き声が漏れていた。

次に白い羽根の少年にも神官は同じことを行った。あれほど力強く山を駆け下りてきた白い羽根の少年は、意外にも大声を出して騒ぎ出した。しかし逃げ出そうとするわけではなく、大声を出すことで痛みを耐える彼なりの方法だったようだ。民衆はその姿を逆に微笑ましく見守っていた。赤い羽根の少年よりも二、三年下のこの少年はまだどこかにあどけなさを残している。苦痛を素直に表現する姿は、山を駆け下りてきたときの神がかった姿から一転、見た目相応であり、人々に親近感を抱かせたのだ。

儀式はすべて終わった。二人はこの部族の中で立派に大人として、そして一人前の貴族として認められたのだ。

高原の都クスコに暮らすケチュア族の男が必ず迎える成人の儀「ワラチコ」。少年たちは過酷な試練をくぐり抜けなければ大人になることはできない。途中で棄権したり脱落した者は次の年もまたその次の年もこの儀式に臨む。中には不幸にも永遠に大人になることができない者もいた。

白い羽根の少年は十五で初めてこの儀式に臨み、一度で、さらに兵士たちの激しい攻撃をすべてかわして傷を負うこともなく合格した。そのような例は今までほとんどなかった。この少年の勇姿を見

物していた民衆はいつまでも興奮が醒めやらず、儀式が終わっても少年の名を連呼し続け、彼を取り囲んだ。

「アウキ・クシ（クシ皇子）！ アウキ・クシ！」

今までもその少年の噂は知られていたが、このときはじめて彼が人々の前に姿を現し、その噂を証明したのだった。

少年の名はクシ。ときの皇帝ピラコチャの三番目の嫡子である。

少年はそれまでも宮殿の中では神童として知られていた。武術の腕前は数いる皇子の中でも一番秀でており、大人を言い負かしてしまふほどの知恵を持っている。そのうえ整った美しい顔立ちをしていた。非の打ち所のない……いや強いていえば、負けん気が強く、無謀と考えることにも果敢に挑戦するために、失敗することも多い。しかしその人間臭さ、子どもらしさが、かえって周囲に好感を抱かせ、皇子を慕う者も多かったのだ。

その皇子の噂は一般の民衆の間にも知られるほどだった。

「二年かけてようやく合格したのに、皇子と一緒にとはなんとという不運だ。私のことなどすっかり忘れられている」

「冗談まじりにクシの肩を叩いて笑ったのは、赤い羽根の少年だ。

彼の名はワイナ。クシよりも三つ年上で、二年かけてようやく儀式を通過したのだ。

この儀式で無傷で済んだ者などほとんどいない。命を落とす者さえいるほどのだから、ワイナの受けた傷など大したものではない。クシが驚異の成績を出さなければ、明らかにワイナは人々から大歓声を送られていただろう。せっかく努力が実を結んだというのに、人々は噂の少年クシに夢中でワイナの存在はかすんでしまったのだ。それでもふたりは、宮殿で一緒に稽古に励んできた気心の知れた



仲なので、ワイナも驚異的な成績を残したクシを心から称えていた。

ワイナは傷を負っているにも関わらず、クシを肩車で担ぎ上げた。ワイナの肩車に乗ったクシが人々の間を練り歩くと、人々はますます熱狂して彼を呼ぶ。その声に応えるためにクシは両手のこぶしを握って天に突き上げた。興奮したワイナがぐるりくると向きを変えるたびに、クシの視界もめまぐるしく変わる。さすがのクシも目が回り、頭がくらくらとしてきた。しかし意地っ張りの彼はそれを振り切るように激しく頭を振ると、また人々の呼びかけに笑顔で応えるのだった。

ふとクシはその姿勢のまま固まった。人だかりの向こう側で自分を見つめる鋭い視線を感じる。クシがそちらに目を凝らすと、人だかりの遥か向こう側で、素早く何か物が物陰に身を隠した。しかしうごめく人々の波に遮られて、それが見えたのは一瞬だったのだ。

クシは心がざわついた。姿が消えてもその視線が未だに自分を見ているような気がする。普段滅多に怖れなど感じたことのない自分が、その一瞬でうろたえていることが不気味だった。

クシの感じた不安は、その何かがこれから自分に大きく関わってくることを予感するものだったのかもしれない。

クシの心とはうらはらに、クシを肩にかついだワイナは陽気な足取りで人々の間を練り歩いていた。クシの体はそれに合わせて踊るように弾んでいた。

## 2、婚禮

### 2、婚禮

成人の儀の翌日、昨日の疲れでぐっすりと眠っていたクシを兄のリョケが揺り起こした。

「クシ、もうすぐ顔合わせの儀が始まるぞ。早く起きろ！」

クシは半開きの目でリョケを睨みつけた。

「はあ？ 顔合わせとは？」

リョケは寝ぼけたことを言う弟の顔を軽くはたくと怒鳴った。

「しっかり目を覚ませ！」

今日は皇帝陛下に新しい側室がやってくる日だ。神殿で花嫁の洗礼が行われたあと、宮殿の大広間ですべての皇族との顔合わせがあるのだぞ」

リョケの言葉でようやく大切な行事を思い出したクシは飛び起きた。

「兄上！ 今、太陽はどのあたりだ？」

「もう中空だ。早く仕度しろ！他の者はすでに大広間に揃って花嫁が来るのを待っているのだぞ！」

クシは寝台の周りに散らかった装飾品を鷲掴みにして、マントを肩に引つ掛けて部屋を飛び出した。リヨケが慌てて後を追い、走りながらクシのマントや装飾を直してやった。

台形型に開いた細長い入り口をくぐると、高い天井の重厚な石造りの大広間が現れる。高窓から差し込む幾筋もの光と、高い位置に掲げられているたいまつが暗い色の石の壁を美しく照らし出していた。壁に貼られた金箔のラインがそれらをよく反射してさらに広間を輝かせていた。

中央通路の左右には大勢の皇族たちが居並んでいる。皇帝の玉座はまだ空席で、儀式が始まるまでにはまだ時間があるようだった。集まった皇族たちが各々勝手に雑談をしているため大広間全体がざわざわと騒がしい。

その中にクシとリヨケが走りこんでくると、何人かが彼らに気づき大声を上げた。

「おお、遅かったではないか！」

「英雄のおでましを今か今かと待っていたぞ！」

「昨日の英雄も、今日は寝坊か」

一斉に笑い声上がる。

クシは顔を真っ赤にして、そそくさと末席に身をうずめた。しかし皇族たちは隠れるクシに容赦なく声をかけて話題の中心に持ち上げようとす。

「しかし、昨日の成人の儀は実に素晴らしかった。あのようは無傷で合格した若者をわしは見たことがないぞ」

「いや。クシ皇子ならやると思っておった」

「宮殿の若者の中では武芸で右に出るものはないからな」

「これからの活躍、おおいに期待しておるぞ」

皇帝の兄弟や従兄弟にあたる年配の皇族たちが口々に褒め称える。クシはリヨケの蔭で肩を竦めて、過剰にも思えるその褒め言葉にちよんちよんと頭を下げていた。

「無傷で成人した者なら、ここにもおりますが……」

上座の方から声が響いた。皇帝の玉座の隣に座るウルコだ。クシの腹違いの兄であるが皇帝によって皇太子に指名されているので、皇帝の隣に座ることを許されているのだ。

ウルコは皇帝の側室の息子だ。ウルコの母は貴族ではなく、皇帝の愛妾から側室に成り上がったのだ。正妃の息子はアマル、リヨケ、クシの三人だった。正妃が亡くなり、皇帝は溺愛するウルコの母を正妃のように扱い、三人の嫡子を差し置いてウルコを皇太子に指名してしまったのだ。

皇帝の地位は世襲制ではあるが、実は後継者選びには嫡子か庶子かはさほど問題ではない。その方法は皇帝が自ら指名するか、あるいは目ざましい功績を上げて貴族の誰もが王に相応しいと認めるか、そのどちらかなのだ。

しかしウルコは頭が鈍く、武芸の才能もなかった。そのウルコをなんとか成人させようと、数年前、皇帝はウルコひとりのため成人の儀を行った。その儀式というのがまったく異例で、普通の式で使われる険しい山とは比較にならないほど低い丘の頂上から、攻撃する兵士たちもない中をただ駆け下りるだけのものだったのだ。

人々は心のうちでは呆れていたが、皇帝の意向に逆らうことは許されないため、ウルコを褒め称えた。そしてウルコの合格を祝って盛大な祭りが何日も催されたのだった。

「ああ、これはこれは。そうでありましたな」

「これは大変失礼を」

何人かが取り繕ったように返事をしたが、ほとんどの者は後ろを向いて苦笑していた。

「クシ。お前も無事一人前の皇族になったのだから、今後は皇帝陛下と私のためによく働くのだぞ」

ウルコはクシの方を見遣って、しゃくれた顎を突き出した。

「はい。皇太子殿下」

クシはそう答えたあと、思わず奥歯をきりつと鳴らした。

「いつもの調子だ。軽く受け流せ」

リヨケはクシを軽くひじで小突いて小声で声をかけた。

「兄上。屈辱ではないですか。後継者に相応しいのは、まずアマル兄さま、次に兄上だ。彼を皇太子と認める者は少ない。父上のお考えが全く理解できない」

リヨケがクシに近づいて小声で叱った。

「しつ。声が高いぞ。この場で他の者にそのような話を聞かれてはまずい」

そしてさらにクシの耳に口を近づけると、それを手で隠してひそひそと耳打ちした。

「クシ。今日の花嫁は十七だそうだ」

「十七？ 父上とはまるで娘か孫ではないですか。私とそれほど変わらぬ、兄上たちよりも年下だ。なんで今さらそのように若い側室を迎えるのですか」

「隣の部族キリスカチエの（天の女王）の娘だそうだ。キリスカチエとケチュアが和睦を結ぶために陛下に嫁いでくる。」

キリスカチエは少数部族だが勇猛なことで知られている。向こうは小さな部族が生き残るために大部族と手を結ぼうと考えた。わがケチュアは有能な戦士が揃うキリスカチエの戦力が欲しいのだ。ここでケチュアとキリスカチエが手を結ばなければ、ほかの強大な敵につけいる隙を与えてしまうからな。

ただ、そのように若い娘ならふつう皇太子に嫁がせるものを、わざわざ父上が引き取ったのにはわけがある。

貴族の中には、ウルコを皇太子としての資質がないと批判する者が多くいる。ウルコが即位する前に、そんな者たちが反乱を起こす危険がないとは言えないのだ。そんな危うい立場の皇太子に、大事な人質の姫を嫁がせて、万が一ウルコとともに失脚させることになったとしたら、キリスカチエは黙っていないだろう。ウルコを皇太子にと望みながら、父上もウルコの評価を無視することができない証拠だ。現皇帝の妃であれば、たとえ父上が亡くなったとしても地位が落ちることはないからな。

キリスカチエは誇り高い部族ゆえ、たとえ自分たちが滅ぼうとも

屈辱を受けたことに対して報復するであろう。最後にはケチュア族が不利な立場に立たされてしまうわけだ。

だから父上自ら、同盟の証である花嫁を引き取るしかなかった」

「しかし……この婚礼にはあまりにも無理が。花嫁が哀れだ」

「そんなことはどうでも良い。つまり父上……皇帝陛下でさえ、ウルコを後継者とすることに不安を感じているということだ」

ふたりがひそひそとやっているとき、貴族たちが前の列から順々に跪いて頭を垂れていった。皇帝が広間に入ってきたのだ。前の列がすべて跪くと、クシとリヨケも慌ててその場にしゃがんで頭を下げた。

皇帝がゆつくりと玉座に身をうずめると、深く頭を垂れていた貴族たちが顔を上げてご機嫌伺いを始めた。

「この度はまことにめでたいことでございます。若い花嫁をお迎えになって、陛下におかれましてもいつまでも若々しくご闊達であられますこと、お喜び申し上げます」

「ほんに……。いつまでもお達者でうらやましい限りですな」

まるで仙人のような皇帝よりもずっと年上の皇族が、ところどころ歯の抜けた口を大きく開けて笑う。

しかし、皇帝の方はお世辞を並べる皇族たちを憂鬱な表情で見つめ、何度も大きな溜め息をついていた。

「クシ。お前の言うとおりだな。花嫁に同情するよ……」

リヨケが頭を下げたままクシを振り返って言った。その言葉にク

シはクツクと肩を震わせて笑った。

「クシ！」

突然宮殿に低い声が響いた。クシが驚いてはっと顔を上げると、皇帝がじつとこちらを見つめている。さては今のやりとりが皇帝に聞こえたのか。クシは慌ててまた視線を下に落とした。

「昨日の成人の儀は大変立派であった。余はそなたを誇りに思うぞ」

クシは驚いて再び顔を上げた。

「ありがたきお言葉にございます」

末席に隠れていたクシは一步前に進み出ると皇帝に深々と敬礼をした。クシが父に褒められたのは初めての事だった。

宮殿では有名なクシの奔放な性格を、父が嫌っていることは薄々感じ取っていた。クシはおそらく若い頃のピラコチャに似過ぎているのだろう。似た者同士はその粗までもが見通せる。クシの姿を見るとピラコチャの中に若い頃の挫折や苦悩が蘇ってくるのかもしれない。

理由は何であれ、父が自分を避けようとしていることにクシは前々から気付いていたのだ。その父がいま、大勢の前で自分を褒め称えてくれた。それはクシにとって何よりも嬉しいことだった。

周囲の者たちがまた騒ぎ始めた。みな一様にクシに賞賛を送ったが、ウルコだけは横を向いて拗ねていた。

「キヌアさまのお着きでございませぬ！」



台形型の入り口に神官が顔を出し、告げた。その言葉で皇族たちはいつせいに壁側に身を寄せて中央通路を広く開けた。すると間もなく大神官が現れ、そのあとにふたりの侍女が花弁を通路にまきながら入ってきた。

やがて入り口に姿を現した娘の姿を目にして皇族たちはみな息を呑んだ。大きく溜め息をつく音も聞こえてくる。しかしそれは決して感動から出たものではなかった。

皇帝の新しい后はケチュアの民が理想とする女性像とは程遠かった。棒のように長く細い肢体は見事な赤褐色に染まっている。細い体といっても肩幅は広く二の腕や太腿には見事に鍛えられた筋肉がせり上がっている。細かく編み込んで後ろにきつく束ね上げた髪につられて目尻がこめかみまで吊り上がり、その目つきが刺すように鋭く見える。

ケチュアの一族となるためにいまさつき太陽神殿で誓いを立ててきたばかりだというのに、動物の毛皮をまとった異民族のいでたちはそのままだ。なめした毛皮を体にぴったりと貼り付けるように纏い、そこから長くしなやかな四肢が伸びていた。

貴婦人たちは口に手を当て眉間に皺を寄せて、おぞましいものでも見るような眼で新婦を睨みつけた。そしてひそひそと囁き合った。その違和感は花嫁も感じ取っているはずだが、彼女はまるで動じず、背筋を伸ばして正面を見据え、堂々と花弁の散らばる通路を歩み出した。はばかりことなく踵わになつて長い四肢は優雅に彼女を運んでいく。その姿が野原を駆ける鹿を思い起こさせる。彼女が進んでいくに連れて、大広間にすーっと異国の風が吹き込んでくるような感じがし、その風に当てられた広間の者たちは今までの騒ぎを止めて彼女の姿に見入った。

クシはこの花嫁の姿にひと目で惹きつけられ、その姿から目が離せなくなつた。しとやかな物腰を羨けられた貴族の女性ならいくら

でも目にするが、このように野性的な女性には会ったことがない。  
クシが思わずその姿をじっと目で追っている、その視線を感じたのか花嫁の方もクシを振り返って見つめた。

花嫁と目が合った瞬間、クシの心臓がドクンと大きく鳴った。その視線は確かに昨日の成人の儀のあとに自分を見つめていたあの視線に違いない。クシの鋭い感覚がそのことを確信した。

(彼女は どうして私を見ていたのだろうか……)

クシが驚いた表情になったのを見て、花嫁は一瞬クスツと口元に笑みを浮かべた。しかしすぐさま無表情に戻って正面を向き直り、何事もなかったかのようにそのまま通り過ぎて行ってしまった。クシはそのとき何ともいえない屈辱感を感じ、思わず唇を噛み締めて俯いた。

皇帝の御前に来ると、一見礼儀など心得ていそうにないこの花嫁が、すつと背筋を伸ばして跪き、ゆっくりと頭を垂れていった。今まで野卑な異民族と思って軽蔑の目で見ていた貴族たちは意外な顔をした。それは、彼女のいでたちからは想像できない優雅な振る舞いだったのだ。

頭を垂れたまま花嫁は、横に従えていた侍女に何やら話しかけた。侍女がその言葉を訳して皇帝と広間の者たちに聞こえるように伝えた。

「キヌア様はこうおっしゃっています。

このたびは偉大なケチュアの皇帝陛下の元に嫁ぐことができたこと、大変嬉しく思います。ケチュア族の仲間入りをした今日この日より、末永く陛下にお仕えすることを誓います」

「うむ」

皇帝は短く答えて頷いたが、それ以上は何も声をかけなかった。明らかにこの若い花嫁に戸惑っている様子だった。

「野生のピューマのようなあの女を飼いならすことなど、父上には到底できないだろうな」

リョケがまたクシを振り返って囁いた。クシは今度は何も返事を返さず、ただ花嫁の後姿をじっと見つめていた。

### 3、戦士の娘

#### 3、戦士の娘

キヌアは重いシヨールをうらめしそうに眺めていた。立ち上がる  
と首に幾重にも重ねられた装飾品が肩に食い込んでくるようだ。自  
分はまるで縄で縛られた家畜のようだと思つた。高窓の向こうに  
広がる青空を見つめて長い長い溜め息をついた。

『姫さまのお気持ちも分かりますが、もうキリスカチエの生活はお  
忘れになつて、早くクスコの生活に慣れることです』

ここに來てからというもの毎日同じ溜め息を聞かされている侍女  
のティツカが諭した。

『ティツカはもうここに慣れたというの？』

『ええ、ここもなかなか楽しいところですよ。それは故郷で高原を  
走り回っていたときのような開放感は得られませんが、ここには本  
当にいろいろな人間がいて、毎日新しい発見がありますから』

ティツカは、キヌアがキリスカチエにいたときから仕えている娘  
だ。王女と侍女の間柄とはいえ、キリスカチエは上下関係に厳しく  
ないため、まるで親友か姉妹のような関係だった。

ティツカにも、今までの自由を奪われ狭い空間に閉じ込められて  
しまったキヌアの憂鬱は痛いほど分かつていたが、キヌアに早くク  
スコの生活に慣れてほしくて、無理に強がって見せた。

『どこへ行つてもすぐに慣れるあなたがうらやましいわ。私はこの数日でもうすっかり年を取ってしまったような気がする……』

ティツカの慰めの言葉も虚しく、キヌアはさらに長い溜め息をついた。

婚礼の日から数日が経った。あの日身に纏っていた毛皮はその日のうちに取り上げられて、代わりにひどく重い分厚い布を体中に巻きつけられてしまった。足くびまである長いスカートが脚に絡み付いて前に進むことさえ儘ならない。いつも後ろにきつく束ねて持ち上げていた縮れっ毛を無理やり引き伸ばして垂らしているため、首や体にまとわりついて鬱陶しいことこの上ない。

さらにキヌアに与えられた部屋は四方を石で囲われて穴ぐらのようだ。陽の光は常に一筋しか差し込んでこない。寝るときにしか建物の中に入らなかったキリスカチエの生活とはまるで違っていた。儀式のときに大広間で顔を合わせた皇帝とは、それ以来まったく会うことはなかった。

『何もお部屋の中に閉じ籠っていることはないのですよ。せめて外に出てみてはいかがですか？』

心配してティツカがいろいろと提案をする。

『こんな服を着ていては走るところか歩くことさえ儘ならないわ。この髪も邪魔で仕方がないし。それに外に出ようとすると番兵がいちどうしたのかと聞いてきて、面倒なのよ』

あのはつらつとしたキヌアが数日で変わってしまったことに、テ

イツカのほづが溜め息をつきたくなった。

『キヌアさまは皇帝のお后なのですよ！ 番兵が何と言おうと自由  
に行動していいんです！』

そう叫んでティツカはキヌアのシヨールを剥ぎ取ると、強引に手  
を引いて部屋の外に連れ出した。

案の定、番兵がどうしたのかと聞いてきたが、ティツカは「あな  
たごときに関係のないことです！」と言い切って取り合わなかった。  
番兵があっけに取られているのを見て、キヌアは小気味良くなって  
ケラケラと笑い出した。

迷路のような宮殿の通路を走り抜けながら、ふたりはスカート  
裾をビリビリと裂きはじめた。そして切り裂いた布を使って長い髪  
を束ねあげる。スカートの裾が無くなり、邪魔な髪を纏めると、カ  
モシカのように軽やかに動けるようになった。故郷の高原を走り回  
っていた懐かしい感触が蘇ってくる。

やがて狭い通路が途切れ広い中庭へと出た。中庭は青々とした草  
が生えているだけで、ほかに何も無い空間だった。普段貴族たちが  
武術の練習のために使っている場所だ。

ふたりは大声で笑いながら中庭の真ん中に走りこんでいつて勢い  
よく転がった。倒れこんだ衝撃でたくさんの草がふわっと舞い上が  
った。草まみれ土まみれの格好でそのままゴロゴロと転がりながら  
ふたりは笑い続けていた。

『ああ楽しい！ そうよ、私は皇帝の後なんですもの！ どんなこ  
とをしても許されるはずだわ！ ねえ、ティツカ』

『そうです。キヌアさまはそうでなくては』

ようやくいつものキヌアに戻ったのを見て、ティツカは嬉しくなった。中庭はかなりの広さがあるが、周囲を石の建物に囲まれた限られた空間だ。しかし今まで石壁の中に押し込まれていたキヌアにとつて久しぶりに味わう開放感だった。

ひゅっつっ

そのとき空を切る音がして何か飛んできた。幼い頃から武術の訓練を受けてきたキヌアは、とつさに身を翻してそれをかわした。その『物』は、キヌアのすぐ後ろに落ち、ボコツと鈍い音を立てて土ほこりを舞い上げた。それは狩猟や戦いで使われる綱の両端に石をくくりつけた（ポーラ）と呼ばれる武器だった。誰かがキヌアを狙って投げたのだ。

キヌアは素早くそれを拾い上げ、瞬時に投げた相手がいる方向を見定めて投げ返した。その一瞬でキヌアには自分を狙った敵の影が見えていた。やがて広い中庭のはるか向こうで小さな人影が動くのが見えた。

「何者！」

ティツカがキヌアを庇うように立ちはだかると、大声で叫んだ。

小さな人影は観念したのかゆっくりとこちらに近づいてきた。ティツカはキヌアを守りながらその人影に目を凝らす。次第にその姿がはっきりしてくると、ティツカが驚きの声を上げた。

「クシ皇子！」

片手でポーラをくるくると回しながら近づいてきたクシは、名を呼ばれてその場に立ち止まった。

「私を知っているのか？」

「聡明で有能と名高い皇子のことは聞き及んでいます。その皇子がこのような悪ふざけをなさるとは！ しかも皇帝陛下のお后を狙うなどと正気の沙汰ではありませんよ。それともこれがクスコの流儀なのですか！」

ティツカは憤慨して、まくし立てた。

「さすがはキリスカチエの戦士だ。私はその腕前を見たかった」

「だからといって寛いでいるところを狙うとは何と卑怯な！」

ティツカは怒りでワナワナと震え出した。キヌアはティツカを落ち着かせようと、彼女を優しく抱えるようにして自分の横に立たせた。

「皇子、どういうことですか？」

まだ覚えたてのクスコの言葉を思い出しながら、キヌアはクシに直接問いかけた。

ケチュア族の者が遠縁にいるティツカはクスコの言葉にも精通している。だからティツカが通訳も兼ねてキヌアの供をしてきたのだ。しかしキヌアはここに来てはじめてクスコの言葉を覚えた。簡単な言葉なら聞いて理解できるほどにはなったが、話すのは容易ではない。

「戦士の實力は不意を狙われたときに発揮される。

キリスカチエ族は老若男女誰もが優れた戦士だと聞いている。その中でも特に（天の女王）の娘は有能だと……」



クシが回していたボーラを止めると、その腕に血が滲んでいるのが分かった。キヌアの放ったボーラはクシの腕をかすっていたのだ。相手の顔も分からないような距離でキヌアは命中させるでもなく外すでもなく絶妙なタイミングで相手に狙いを定めていたのだ。相手が敵だと確信できていれば間違いなく急所を狙っていただろう。

「私を試して何を……」

「別に何も……。ただ有能なキリスカチエの戦士の技をこの目で見てみたかっただけだ。」

ついでに、成人の儀で私を探っていた理由も知りたかった」

キヌアはさつと表情を変え、隣のティツカを振り返ると肩を竦めて見せた。

「気づかれていたのね」

ようやく落ち着きを取り戻したティツカがキヌアに代わって説明した。

「キヌアさまは婚礼の前にクスコの様子を見に来られたのです。ちょうどケチュア族の成人の儀が行われており、あの儀式でいまのケチュアの軍事力を窺い知ることできました」

「それでどう思われた？」

キヌアは視線を下に落としてしばらく考えていたが、顔を上げると口先でふふつと嗤って言った。

「まるで子どものお遊戯のようだった」

「キヌアさま！」

齒に衣着せぬキヌアの言葉に、ティツカがハラハラしながらキヌアとクシを何度も交互に見た。クシは啞然としてキヌアを見つめた。キヌアは構わずに続ける。

「キリスカチエではあれくらいに試練に耐えられない弱い者は生き残れない。ケチュア族は平和な一族だ……」

それを聞いてクシは大声で笑い出した。

「やはり君は素晴らしい戦士だ。クスコにはそんな疑問を持つ人間はひとりもないよ。……そう、この国は平和に慣れすぎて本当の試練を知らないんだ」

笑ってそう言いながら、最後には悔しそうに目を伏せた。

「この国ではあなたは変わった存在ね。儀式の内容はともかく、あなたの能力には感心した」

「いいや。私は未熟だということが今日よく分かったよ……」

クシが腕を押さえた。さっきボーラを回していた腕が腫れあがっている。キヌアの投げたボーラはクシの腕にかすり傷だけでなく、かなりの衝撃を与えていたようだ。

「まあ、手当てを！」

ティツカがクシの腕を取ろうとしたが、クシは体をねじって腕を隠してしまった。

「このくらい、大丈夫だ。」

敵が反撃できないように、あの距離で、そして一瞬で確実に腕を狙うことができるとは。そんな戦士が存在するとは思わなかった。

お願いがある。どうか私にキリスカチエの武術を指南してほしい」

クシはキヌアの正面に来て跪き、頭を下げた。

「そんなこと、無理です。キヌアさまはケチュアとキリスカチエの架け橋となるために皇帝陛下に嫁いできたのです。皇帝陛下の許可無く勝手なことができるはずないじゃないですか!」

「ほう。勝手に部屋を抜け出し、服を破って、宮殿中を飛び回ることは陛下が許したというのか?」

ティツカは「うっ」と唸ってキヌアを見た。キヌアはケラケラと笑い出した。

「皇帝は……父上は何も言うことはできまい。君を後に迎えたものの、年老いてすっかり臆病になってしまった父上は、勇猛な戦士である君もキリスカチエ族も怖いのだ。」

それに君も、これから毎日宮殿の中に籠って暮らしていくことなどできるのかな?」

キヌアは暗い石壁の中でじっとしている自分を想像して吐き気がしそうになった。

「わかった。その話、受けましょう」

クシの顔が輝いた。

「その代わり途中で逃げ出すことは許さないわよ」

久しぶりにキヌアの目が戦士の鋭い光を宿した。

「キヌアさまがここで生き活きと暮らすにはそれが一番良い方法でしようね……」

ティツカはそう言って苦笑いするしかなかった。

#### 4、キヌアの教室

#### 4、キヌアの教室

カツ、カツ、カッン……。

早朝の中庭に響く音でリョケは目を覚ました。空はまだ薄暗い。

「相変わらず、熱心だな……」

ぼやいて再び寝付こうとしたがうまくいかず、結局起き上がった。マントを羽織ると、中庭に行ってみることにした。

朝もやの中に二人の人影が見えた。向かい合った人影は中庭の中心でゆっくり回るように歩きながら、近づいたり離れたりしている。近づいたときお互いの持つ石斧をかち合わせる乾いた音が、静かな宮殿に響いているのだ。

リョケは中庭の隅に腰掛けてその二人の動きをぼんやり眺めていた。

「クシと、キリスカチエから来た側室か……」

突然後ろから声がして、リョケは驚いて振り返った。兄のアマルが腕を組んで立って同じようにもやの中の人影を見つめていた。

アマルはすでに独立して王宮の外に自分の館を構えている。將軍職にある有能なふたりの武将とともに、クスコの軍部を執り仕切る

重要職に就いている兄は、このところやけに忙しいようだ。毎日のようにまだ夜の明けきらないうちから宮殿に出向いて軍部の会議に顔を出す。軍部とは違う役職にあるリヨケには兄の仕事について余計な口出しすることはできないが、兄が早朝にここにいること自体あまり穏やかな状況ではないということは察することができる。

「兄上。おはようございます。随分とお早いことで……。」

もう何日になりますか。ああやって毎朝稽古しているのですよ」

「クシも妙なことを考えたものだ。異部族の女に武術を教わろうとは……。」

「女と言ってもキリスカチエの戦士ですからね。腕前は確かな筈です」

「しかしあの女はケチュアとの和平の証として皇帝陛下に嫁いできたのであって、武術の指導に来たのではない」

「そんなことはクシも彼女も百も承知ですよ。皇帝陛下の後であるのは事実なのですから、逃げ出そうとしない限り、彼女が何をしよう、とやかく言うことはできません。」

それどころか、クシのお蔭でかえって父上もほっとなさっているのではないですか？ 何せあの女戦士を娶ったものの、どう扱ってよいのか分からず、未だに彼女に会おうともなさらないのですからクシが彼女の相手をしてくれるのでキリスカチエの機嫌を損ねずに済んでいるのですよ。もちろん、クシは純粹に武術を教わりたいたけでしょうけど」

「なんと物言いだ、リヨケ！」

「本当のことです」

リヨケは、すっかり老け込んでしまったかつては勇猛だった父王に苛立っているのだ。アマルにも同じような思いがないわけでもないが、あまりにもあからさまな事を言うリヨケを睨みつけた。

「いくら自由が許されているとはいえ、皇子と側室が早朝に二人きりで会っているなど、ほかの貴族たちに知られたらどのような噂が立つか分かったものではない。クシにあまり派手なことをすると申し伝えておけ、リヨケ！」

そう言い捨ててアマルはその場を後にした。リヨケは顔を顰めて兄の後姿を見送った。

アマルは冷静沈着で思慮深い。それを買われて今の重要職に就いているのだが、実は保身的で事を荒立てるのを好まないだけなのだ。あの兄にはウルコから王位継承権を奪おうという気概はなく、ウルコが皇帝の座に就いたあと、何食わぬ顔で従順に仕えていそうだと兄の姿が消えたあと、リヨケは脇にペツと唾を吐き出した。

クシは必死だった。

この戦士にはまだ敵わない

向き合ってみると、ますます相手の強さを思い知り、今まで誰よりも強いと称されてきた自分が恥ずかしくなった。しかし同時にそれは喜びでもあったのだ。高い位置にいる彼女に追いつくという新たな目標ができたのだから。

必死になって斧を振り回すクシとは対照的に、キヌアは斧を持つ腕をダランと下げたまま、ただするするとクシの攻撃をかわす。そ

してときどき自分の正面に来たクシの斧を自分の斧で軽く受け止める。しかし自分のほうからクシに攻撃をしかけることはしなかった。彼女が薄ら笑いを浮かべているようにさえ思えてくる。クシは余計に焦り苛立った。

キヌアの視線が一瞬横に逸れた。その瞬間をクシは見逃さなかった。今までの苛立ちを全てぶつけるように、渾身の力をこめて斧を振り上げた。

リョケの視線の先で、朝もやの中のひとりが「うっ」と声を上げて倒れこんだ。リョケは慌ててそちらに駆け寄った。クシが腕を押さえてうずくまっていた。

「なんと、クシが倒されるとは！」

「兄上、見ていらしたのか！ 恥ずかしい」

恥ずかしいというよりも、悔しいというのが強いのだろう。クシは唇を噛んで拳で地面を思い切り叩いた。

キヌアは座り込んでいるクシを見下すような格好で立ち、彼の目前に斧を向けた。

「私の隙をついたと思ったのでしょうか、あなたの動きはすべて見えていますよ。クシ皇子。」

焦れば焦るほど視野が狭くなるものです。戦いは力だけで勝てるものではない。全神経を研ぎ澄ませて自分の周りの空気を読み取ることが大切なのです。常に命がかかっているとせば自然と感覚が鋭くなるものですよ」

「悔しいが、私には勉強することが山ほどあるようだ」



クシはそのまま手足を投げ出して地面に転がった。

「少し休みましょう」

キヌアも自分の斧を置こうとしたとき、

「キヌアどの、私と手合わせしてくれまいか」

と言って、リヨケがクシの斧を拾ってキヌアに向かって突き出した。

「ええ、どうぞ。手加減はしませんよ」

キヌアはニツと笑って、またゆっくりと斧を構え直した。

筋肉質のしなやかな体躯にぴったりと張り付くような服を着ている。キリスカチエ族が着る毛皮をクスコでしかも宮殿内で着ることは許されない。しかしクスコの女物の服といえば、裾も袖も長いものばかり。この稽古のためにわざわざ侍女に仕立てさせたのか、あるいは長い服の袖と裾を切って腰紐でぴったりと巻いたのだろうか。いずれにしてもその特別な服を着て、長い髪の毛をしっかりと纏め上げたキヌアは非常に好戦的に見えた。キリスカチエの伝統であり相手を威嚇する目的のある、眉間や頬や手足に刻まれた刺青が、余計に攻撃的に見せている。

「私はクシと違い、戦の覚えがある。こちらも容赦はしないぞ！」

リヨケはキヌアの迫力に気圧されないように凄んで見せた。クシよりも五つ年上のリヨケは、確かに辺境の部族との小さな争いに出征したことがあるのだが……。

リヨケは斧を担ぐように構えると、キヌアに突進していき、彼女の頭めがけて「やあっ」と斧を振り下ろした。斧の刃先が額を掠めたかと思われた瞬間、キヌアは素早く身を引いた。

全身の力を込めて斧を振り下ろしたため、リヨケは勢いを止めることができず、躓いてよろけた。前のめりになったリヨケの首筋にキヌアが肘てつを加える。リヨケは目の前が真っ暗になりそのまま顔から倒れこんでしまった。

すぐさまキヌアが倒れたリヨケの両肩を掴んでグツと力を入れる。リヨケはすぐに目を覚ました。

「兄上、なんと無様な!」

泥だらけの兄の顔を見て、クシはお腹を抱えて笑い転げた。

「キリスカチエの戦士は聞いていた以上の腕前だ」

「腕前? 私の腕前をお見せする前に倒れておしまいに……」

「やあ、これは……そうであった。すまん!」

リヨケが頭を掻いて笑う姿を見て、キヌアも笑い出した。ひとしきり三人で笑い合うと、リヨケがキヌアに切り出した。

「キヌアどの、貴女の指導をクシに独占させておくのはもったいない。ほかの貴族の子どもたちも指導していただけないか」

「私? 私は子どもの相手などしたことがないので、できるかどうか」

「子どもと言っても、成人式を迎える直前の少年たちだ。ケチュアの未来の戦士を育てるために協力していただきたいのだ」

「兄上、その申し出はあまりにも大胆です。皇帝の側室である彼女に、公に武術の指導をしてほしいとは」

クシが口を挟むと、リヨケはクシを睨みつけた。

「大胆なのはお前の方だろう。いくら武術の練習とはいえ、側室と皇子が二人きりで会っては、どのような噂を立てられるか分かったものではない。彼女が正式な指導者であれば、お前も堂々と習うことができるではないか」

「なんとという下世話な勘ぐりだ。大人はそのようなことを疑うのか！」

クシは横を向いて拗ねた。

「クシ、貴族たちがいまウルコを擁護する派と改革派に大きく分かれて反目し合っていることはお前も知っておろう。まだお前には理解できないのだろうが、われらを陥れようとする者たちはどんな些細なことも醜聞に仕立てようとするのだ。慎重に行動せねばならない」

リヨケはキヌアの方を向き直ると続けた。

「キリスカチエとケチュアが手を組んだのは、大国の脅威に備えるためだ。しかし貴女も気付かれたと思うが、われわれはしばらく大きな戦いを知らずに来たので若い世代は戦い方を知らぬ。今、大国に攻められればまともに戦える戦士はいないのだ。」

父王も皇太子もキリスカチエと手を組んだことで安心しているが、それは大きな間違いだ。貴女がここで戦士を育てればクスコに来た意味が大いにあるというものだ」

それを聞いてキヌアは目を閉じ額に人差し指を立てて考え込んだ。しばらくの間そうしてから、ゆっくり顔を上げると言った。

「私にその大役が務まるか分かりませんが、お引き受けしましょう。しかしお二人にも私の侍女にも手伝ってもらわなければなりません」

「それはありがたい！ キヌアどの、是非頼む」

リヨケはキヌアの肩を掴んで頭を下げた。キヌアは微笑んで頷くと、リヨケとクシを見て言った。

「キヌアと呼んでもらって結構です」

しかしクシは難しい顔をして考え込んでいた。彼は兄の話の中にあつた重要な部分を聞き流してはいなかったのだ。

「兄上、大国の脅威とは、もはや単なる危惧ではないということです」

「危惧に終わるかもしれないし、そうでないかもしれない。いずれお前自身も現状を知る時が来るだろう」

空が明るくなり、三人の姿を朝焼けが真っ赤に染めていく。やがて不穏な朱い太陽が静かにクスコの街全体を照らしていった。

数日後、宮殿の中庭に貴族の少年たちが大勢集められ、キヌアの教室が始まった。

面白いことに、婚礼の儀で蔑む様な目でキヌアを見ていた貴族たちも、クシを負かすことのできる女戦士から直々に自分の子どもを教えてもらえるとあって、競って子どもを参加させようとした。故にこの教室に反対する声など上がる隙はなかったのだ。

すべてはリヨケの巧みな触れ込みのお蔭だった。

あまりの評判にキヌアだけでは到底手が足りず、侍女ティツカとクシとリヨケもその対応に大わらわだ。

派手なことをするなと伝えておいた筈なのに全く逆の状況になってアマルは頭を抱えたが、今更どうすることもできなかった。

「リヨケ兄さまは、悪知恵にかけては天下一品なのだ」

クシがキヌアに囁くと、キヌアは嘔き出した。

「皇子、私にも手伝わせてもらえないか？」

後ろから声をかけられて二人が振り向くと、成人の儀でクシと一緒に合格したワイナが立っていた。ワイナは成人の儀からそれほど経っていないというのに、見違えるような逞しい体つきになっていた。日に焼けた黒い肌がそう見せているのかもしれない。

彼は儀式のあとすぐに、自ら願い出て辺境の視察団に付いて西の外れまで行っていたのだ。

「ワイナ、戻ったのか？」

クシは喜んで親友に飛びついた。

「ああ、ちょうど昨日帰ってきたところなのだ。この面白いことに皇子も絡んでいると聞いてね。是非私も参加したいと思ったんだ」

「それは心強い！」

クシがワイナを紹介すると、キヌアは

「ええ、よく存じ上げています」

と言って笑った。それもそのはず、キヌアは成人の儀の様子をすべて見ていたのだから。クシとともに合格した赤い羽根の少年を知らない筈はない。しかしそんないきさつを知らないワイナは不思議な顔をした。

「勇敢な青年ワイナの噂は、キリスカチエまで届いていたそうだよ」

「冗談めかしてそう言つと、クシはキヌアの方を見て肩をすくめて見せた。

クスコの宮殿に活気が戻ってきたのは何年ぶりだろうか。戦いを忘れ、意味も分からずに形式だけの稽古をしていた少年たちは、部族を身をもって守ろうとしてきた戦士キヌアの気迫に触れ、意欲が湧いたらしい。今まで嫌々訓練を受けていた少年たちの目が皆輝いていた。

そんな少年たちを見て、クシやリヨケやワイナも身の引き締まる思いがした。自然と指導にも熱が入る。

中庭に元気な子どもたちの掛け声がこだまする。自分の子どもを

見守る親たちだけでなく、子どものいない貴族や貴婦人たちもその様子を興味深々に見に集まってきた。

キヌアを侮蔑していた貴婦人たちも、自分たちとは違う特技を持つキヌアに対して見る眼が変わったようだ。逆に憧れるような眼差しで彼女を見つめていた。

毎日賑わう中庭の様子を見ていて、面白くないのはウルコだ。ただでさえ、クシの成人式から『ウルコさまの式るときとは大違いだ』と噂する声を耳にして苛立っていたのだ。

皇帝には「側室が勝手なことを始めたのですが、あのまま放っておいて良いのですか」と告げたが、関わるのが面倒な父王は「皆が必要だと思うのなら、それでいいのではないか」と全く煮え切らない。ウルコの視線は常に、キヌアの教室でも中心的な存在であるクシに注がれていた。

「あいつがすべての元凶だ。この平和なクスコに余計な揉め事を持ち込む。いつか思い知らせてやらねば」

キヌアの教室が開かれてから特に、ウルコのクシに対する恨みが募っていった。今やクシを陥れる計画を練ることで彼の頭の中はいっぱいだっただ。

ウルコの気持ちこそ他所に、キヌアの教室は連日大賑わいだ。

生徒たちの一番の楽しみは稽古のあとに行われるクシとキヌアの合わせ稽古だった。少年たちの指導が終わると、クシの指導を兼ねてキヌアとクシが合わせ稽古をするのが日課になっていた。生徒たちはその試合の観戦を心待ちにしているのだ。小さな観客たちに囲まれて対戦するふたりは緊張を隠せない。少年たちは皆、憧れのクシに勝ってほしいと応援する。

しかし何度対戦しても、クシが一方的に攻撃をしかけ、キヌアがそれをかわして最後に一撃を加えるという態勢は変わらなかった。大勢の小さな観客がいる手前、クシに恥をかかせまいとしてキヌアが負けてみせることもあった。少年たちはクシが勝つと大歓声を送ったが、クシにとってこれほど屈辱なことはなかった。しかし、屈辱感を味わう度にクシの腕は少しずつ確実に上がっているのだった。いつかキヌアに追いつき追い抜こうと、クシはひたすら練習に励むのだった。



## 5、狩り（その1）

### 5、狩り

ざわざわと騒がしく、朝から宮殿中が落ち着かない。大勢の走り回る音、話し声、ときどき怒鳴りつける声も聞こえてくる。そんな喧騒を他所に、クシはひとり部屋の中で作業に没頭していた。

拳ほどの石を細かく編み上げた縄で包みしつかりと固定する。そこから一筋の縄を伸ばし、その反対側にも同じように石を結わえ付ける。片腕を伸ばしたくらいの長さの縄の両端に同じ大きさの石が均等に結び付けられたもの、（ポーラ）と呼ばれる道具を、昨晚からもう十数個仕上げた。

最後のポーラの縄をしつかりと引き締めて準備を完了させると、それらを束ねて腰に提げ、肩に斜めに掛けたたすきに挟むようにして背中に小ぶりの石斧を携えた。

部屋を出ると宮殿内の騒ぎがますます賑やかに聞こえてきた。皆が慌ただしく動き回っている中を、クシは悠々と歩いていった。

その日は、年に一度、貴族たちが揃って狩りを行う日なのだ。それなりの地位のある者たちは大勢の侍従を遣って狩りの支度をする。主人のために侍従や召使いが粗相のないようにと必死で走り回っているのだ。

成人したばかりのクシは、初めてこの行事に参加することを許された。新参者の若い皇子には代わって支度をしてくれる侍従などいない。しかし自分の納得のいくように準備するほうがよほど楽だ。

ばたばたと走り回っている侍従、召使いたちを横目に見ながら、クシはつくづくそう思った。

宮殿の出口に続く広い廊下を歩いているとき、突然見知らぬ女性が声をかけてきた。

「大物を仕留められるといいわね」

クシは怪訝な顔で女性を見る。

女性にしてはやけに背が高く、そのせいで着物の丈が合わずに、本来隠れるはずの細い足首がむき出しになっている。体つきもこれまた女性らしくなく頑丈そうで、随分と肩幅があるので衿ゆきがきつそうだ。無造作に垂らした長い髪にはあまり艶がなく、縮れて大きく広がり顔を半分隠している。優雅な宮殿の貴婦人とはとても思えない。

はて、どこで会ったのかと考えを巡らせながら、しばらく女性の顔を見つめっていると、彼女の背後から見慣れた顔の女性が声をかけてきた。

「クシ皇子。今、狩りのお見送りに行くところだったのですよ」

そう言ったのはティツカだ。

「さあ、行きましょう。キヌアさま！」

「キヌアなのか？」

クシは驚いて、女性の顔をしげしげと覗き込んだ。

顔の左右に垂らした髪の毛に隠れてよく分からなかったのだが、彼女が軽く首を振って髪が払われると額や頬に小さな刺青があるの

が分かった。よくよく見ればその顔は確かにキヌアのものだった。

「ほら御覧なさい、ティツカ！ 私、やはり広場には顔を出さないわ！」

キヌアはすっかりふてて、踵を返すと自分の部屋に向かって歩き出した。

「キヌアは狩りに参加しないのか？」

勢いよく振り向いて、キヌアが怒鳴った。

「女は参加してはいけないそうよ！ 盛装をして殿方を送り出すのが慣わしなんですって！」

狩りには誰よりも自信のある自分が女という理由だけでどうして参加できないのかと目で訴えている。さらに慣れない着物は窮屈なうえ似合わないこともよく分かっていて、その姿で人前に顔を出したくないのだろう。

毎日武術の指導をしているキヌアがクスコの女性用の着物を身につけることは今までほとんどなかったのだ。おそらくキヌアの丈に合う着物の用意が間に合わなかったのだ。

ぶいっつと後ろを向いて歩き出したキヌアの腕をクシが追いかけて捕まえた。

「良い所がある。ティツカも一緒に来てくれ」

クシはキヌアの腕を無理やり引っ張り、廊下の奥へと歩き出した。「何を！」と言いながらもクシに引かれるままにキヌアも付いていく。ティツカが慌ててその後を追った。

長い廊下の突き当たりに広い部屋があった。立派な構えの部屋だが人気ひとけはない。中へ入るとすべてがきれいに整理されていて、今さっきまで部屋の主が身支度をしていたかのように、身につける様々な物が並べられていた。きれいに畳まれて重ねられた色鮮やかな織物や美しく輝く銀や青銅の装飾品は、その部屋の主が女性だったことを物語っている。

「ここは一体……」

「私の母の部屋だ」

「母……と言うことは、皇后さま？ 勝手に入ったことが知れたら……」

ティツカが怯えて後ずさった。

「母は私が幼い頃に亡くなった。この部屋には母の遺品がそのまま置いてあるのだ」

キヌアは美しい織物や装飾品にうっとり見入った。

「この中に、どれかキヌアに似合うものが見つかるかもしれぬ」

クシはあれこれと物色すると、積み上げられた織物の一番下にある薄手の布を引っ張り出した。

「キヌアにはこれが合いそうだ」

クシが手にした小さい長方形の布には、極彩色の模様が細かく織

り込まれている。

「この頭巾を被れば髪が気にならないだろう」

クシはキヌアを石の寝台に座らせると、頭にその布を軽く掛けた。ティツカがクシに替わって布をキヌアの頭に押さえつけると、広がった髪を丁寧にまとめて頭巾の中に押し込み、布に付けられた細い紐を顎の下で縛って固定した。

「まあ、キヌアさまのお顔の色によく似合って素敵だわ！」

ティツカは自分で作った作品を眺めるように、キヌアの顔を見て感嘆の声を上げた。そうしている間にもクシはまた部屋の中を探し回って、今度は厚手で大きめの布と青銅製の長いピンを持ってきた。

「着物の丈が合わないのは、このショールを掛ければ目立たないだろう」

クシから受け取った布をティツカが広げてみると、それはキヌアが被っている頭巾よりもさらに色彩豊かな模様が織り込まれた大判の布だった。キヌアもティツカもその色の鮮やかさに思わず揃って溜め息をついた。

「クシ、亡くなった方とはいえ皇后さまの物ですもの。勝手に持ち出せばすぐに分かってしまうわ」

心配そうに言うキヌアにクシは首を振った。

「大丈夫。これらは母が自分には似合わないと言ってほとんど身につけたことがなかった物なのだ。この青銅のピンも、皇后が公で身

につけるものは銀と決まっているから、人前でつけることはなかった」

クシがキヌアの肩に布を掛けると、ティツカが丁寧の前に重ね、ピンを刺して留めつけた。

「キヌアさま、お立ちになって」

ティツカに促されてキヌアが立ち上がると、クシとティツカが同時に「おお！」と声を上げた。

先ほどまで鬱陶しく顔に掛かっていた髪の毛を色鮮やかな頭巾が覆って、キヌアの日にやけた凜々しい顔を際立たせていた。丈の合わない不恰好な着物はすっぽりとシヨールに隠れ、その極彩色の模様がキヌアの長身の体をかえって引き立てている。

「これなら外に出るのも恥ずかしくないだろう」

「恥ずかしくないどころか、ほかのご婦人よりもずっと美しいですよ！」

クシとティツカは、キヌアをままごとの道具にして遊ぶ子どものようなはしゃぎようだ。ふたりのおもちゃにされているようであまり気持ちは良くないが、いつまでも拗ねて籠っているわけにはいかない。キヌアはふたりに抱えられるように広場へと向かった。

広場では、黄金で装飾された皇帝の輿の周りに大勢の貴族が集って出発を待っていた。その周りでは歌や楽器が奏でられてお祭り騒ぎだ。

クシが遅いのであちこち捜し歩いていたリヨケが、広場に入って

きたクシをいち早く見つけて駆け寄った。

「婚礼の儀のときといい、お前というやつは！」

文句を言おうとしたが、クシの後ろに立つ女性を見て言葉を切った。

「クシ、こちらの方は……」

クシはティツカと顔を見合わせてクスクスと笑った。その様子を見てリヨケは女性に向き直り、驚いた顔で頭から足先まで何度も視線を往復させた。

「まさか、キヌアなのか？」

クシとティツカが同時に深く頷く。キヌアは恥ずかしそうに顔を伏せた。

「ほう。なんと見違えた。どうやって化けたのだ？」

近づいてそう言ったリヨケの脛をキヌアが思い切り蹴飛ばした。シヨールの中でビツと着物の裾の裂ける音がすると同時に、リヨケが脚を抱えてうずくまっていた。

狩りに出る男たちの列を女たちが左右に並んで見送る。特に皇帝の輿の右側に居並ぶ側室たちの列は華やかだ。ウルコの母を先頭に順々と若い后が並んでいる。

輿がゆっくりと進んでいく間、見送る側室たちの顔をひとりひとり眺めていた皇帝は列の最後に並んだ后に思わず目を留めた。驚い

た顔になった皇帝は、輿が行き過ぎてても振り返ってその后を見つめている。輿のかなり後ろの方を歩いていたクシとリヨケにも、皇帝の表情の変化が見て取れた。

「これで父上も、キヌアを少し見直してくださるといいのだが……」

リヨケの言葉にクシも頷く。ちょうどふたりはキヌアの横を通り過ぎるところだった。ふたりが手を上げると、キヌアはシヨールの陰から片手を出し、力強く握って見せた。そして二人に鋭い視線を送りながら深くゆっくりと頷いた。

「私の分まで大物を捕らえてこいと言っているぞ！」

「格好は変わっても、中身はそう簡単に変えられるものではないな……」

クシとリヨケはそう囁きあってクスクスと笑った。クシがその応援に答えるようにキヌアに向かって同じように拳を握って頷くと、キヌアは柔らかな表情に戻ってにっこりと頷き、シヨールの陰から出した手を小さく振った。

クスコからだいぶ離れ、一行は見渡す限り丈の低い草しか生えていない広大な平原に着いた。

周囲が広く見渡せる場所にすみやかに天幕が張られ、下ろされた輿が据えられて、そのまま皇帝の玉座になった。皇帝の天幕の周りに貴族たちは各々天幕を張り、自分の持ってきた道具を点検し、どの辺りで狩りをするかを仲間と話し合った。

最大の見せ場は狩りの最後に行われる。目星をつけた大型の獲物



を貴族たちが一斉に追いかけて、罾に追い込んで捕らえるのだ。立派なりヤマや鹿を総出で追いかけていく様は壯観だ。

しかし大掛かりなその猟が行われる前に貴族たちは各々小型の動物を獲りに行く。特に初めて参加した者は、そこでどのような動物を捕らえたかによって、古参たちに自分の実力を見せ付けることができるか否かが決まるのだ。

新米のクシは同じく新米のワイナと顔を突き合わせて何を狙おうかと作戦を立てていた。

そのとき突然、クシのいる天幕へ大勢の侍従を引き連れてウルコがやってきた。

「お前たちは今日が初めてなのだ。あまり気負うでないぞ。何も捕らえられなくて当たり前なのだ。ウズラー一羽で十分。ビスカツチャ【野うさぎの一種】など捕らえたら大したものだからな。グアナコ【鹿くらいの大きさの動物】を狙おうなどと考えるでないぞ。せいぜい大怪我をして終わりだ」

ふたたりを覗きこんで馬鹿にしたようにそう告げると、ウルコは高笑いをしながら自分の天幕へ戻っていった。

「今に見ている。グアナコでもリヤマの群れでも、あいつに獲れないものを獲って驚かしてやる！」

ウルコの言葉でクシがひどく興奮し出したことに気付き、ワイナは慌てて忠告した。

「皇子、皇太子の口車に乗ってはいけない。皇子の気持ちを煽って恥をかかせようとしているのだ」

「私が気負って何も獲れなくなるとでも思うのか、ワイナ。失敗しなければ恥をかくことなどない。ウズラしか獲れずに終わったら、あいつは私を馬鹿にしてあざ笑うだろう！」

そう言つと、クシは斧とポーラをひつつかんで広い平原へと駆け出して行ってしまった。残されたワイナは嫌な胸騒ぎを覚えたが、クシに限って失敗することはないと思ひ直し、自分の獲物を探しに行った。

## 5、狩り（その2）

その日は穏やかな良い天気だったが、平原にはほとんど動物の姿が見られなかった。狩りの腕には自信のあるアマルやリヨケでさえウズラー羽すら仕留めることができず、高原を彷徨っていた。誰よりも早く出発したクシはそんなことなど知らない。自分のアタリの付け方が悪いのだと考えて、平原のずっと先まで獲物を探して歩いていった。

皇帝や貴族たちの天幕もすっかり視界から消え、ほかの貴族たちの姿もどこにも見えない。クシはいつのまにかひとりぼっちになっていた。しかし誰にも知られないうちに大きな獲物を捕らえられるかもしれないという期待で胸が高鳴り、不安などまったく感じていなかった。

行く手にみすばらしい小屋が何軒か寄り集まって建っているのが見えてきた。ほんの数家族が暮らす小さな集落なのだろう。

しかし小屋に近づいてみると人の気配はまったくなく、どの小屋もうち捨てられたあばら屋のようだ。住人はとくにここを捨ててどこかへ移り住んだのだろう。今は人が住んでいないにしてもかつて集落があったということは、狩りに適した平原を逸れてしまったのだとクシはがっかりした。

来た道に引き返そうとしたとき、すぐ脇にある灌木の茂みが揺れて、ひとりの老人が姿を現した。老人はひとり集落の周りを散歩でもしていたのだろうか。クシの姿を見て目をまんまるにして驚いた。そして貴族の身なりをしたクシを畏れ、慌てて跪き、頭を地面に擦り付けた。クシはあまりにも恐縮している老人に優しく声を掛けた。

「私は狩りの途中で誤ってここへ迷い込んでしまったのだ。ほかには誰もいない。そんなにかしこまることはない。面を上げてくれ」

老人は恐る恐る顔を上げて、上目遣いにクシを見た。

「今日は獲物がまったく見つからないのだ。どこかでリヤマの群れなど見かけなかったか？」

クシは老人の緊張を解こうとわざと親しげに声をかけてみた。老人はしばらく無言でおどおどとクシを見上げていたが、何かを決心したように腰を浮かせると、クシに縋り付いてきた。

「貴方さまならわしらの村を救ってくださいるかもしれない。」

実は、わしらの村の畑が黄金のビクーニヤ【グアナコと同じく鹿くらいの大きさの動物】に荒らされて困っているのです。追い払っても追い払っても何度もやってきて、作物の芽はほとんど喰い尽くされてしまいました。わずかに残る作物の芽を喰われてしまったら、わしらはみな飢え死にしてしまいます。そうなればこの村と同じように滅びるしかありません。

ビクーニヤは神の遣い……捕らえたことが知れば死罪です。わしはこの老いぼれの命を捧げて村を救いたいと思い、ビクーニヤを追いかけてきたのです。しかしあのすばしっこい動物をどうやって捕らえられるのか思案に暮れておりました。しかし貴方のように立派な方なら……。どうか、わしの代わりに黄金のビクーニヤを捕らえていただけませんか？」

老人は哀願するようにクシの服の裾を掴んだ。

「しかし……貴族であってもビクーニヤを捕らえるのは特別に皇帝

の許可を得た者でなくてはならないのだ。それは難しい相談だ」

「捕らえたビクーニヤを皇帝に献上すればお赦しを得ることもできましょう。わしら庶民には決してできませんが、貴族の方なら皇帝に差し出すことは可能でございますよ」

「例え皇帝に差し出したとしても、許しを得ずに捕らえたことには変わりない。そのようなことが赦されるかどうか……」

「ここに迷ってこられたあなたを、わしは勝手に天が遣わした救い主だと思い込んでしまいました。しかし無理なお願いなら諦めるしかない。わしがうまく捕らえてひとり罪を被るか、そうでなければ村人はこのまま飢え死にするのを待つほかはないのでしょうか……」

老人は縋り付いた手をするするとクシの脚に沿って下ろし、そのまま地面についてその上に顔をうつ伏した。

クシは老人がうつ伏したまま肩を震わせて泣くのをしばらく見下ろしていたが、溜め息を深くつくと、しゃがんで老人の肩に手を置いた。

「ビクーニヤはどの辺りにいるのか、案内してくれ」

老人ははつと顔を上げると、クシの腕を掴んで今度は嬉し涙を流した。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

目の横にある大きなホクロがますます老人を憐れに見せて、クシは助けてやらねばという使命感にかられた。

老人に連れられてクシは集落を越え、さらに向こうに続いている平原へと歩いていった。

遙か向こうのほうに二頭のビクーニヤが草をはんでいるのが見えた。太陽に照らされて、繊細な体毛に覆われたその動物は黄金に輝いているように見える。その姿は太陽神の遣いと呼ぶにふさわしい。ビクーニヤの毛はどの動物の毛よりもなめらかで美しいので、その毛織物は皇帝しか身につけることを許されていないのだ。

「あの二頭です。ビクーニヤは敏感で逃げ足が速い。慎重に近づいてください」

老人が親切に教えてくれるが、クシは緊張から返事も返せず手にじつとりと汗をかいていた。ポーラが滑らないようにしっかりと手に巻きつける。

「あとは任せて、そなたは後ろに下がっているがいい」

クシは草の蔭に身を潜めながら、少しずつ少しずつ獲物に近づいていった。ビクーニヤは相変わらずのんびりと草をはんでいる。

ポーラが届く距離まで近づいたとき、一頭がさつと顔を上げて耳を立てた。クシが素早くポーラで頭を狙う。ポーラが見事に命中して一頭目が倒れ込む前に、二頭目は向きを変えて走り出した。二頭目の足を目掛けてクシはポーラを放つ。縄の両端にくくりつけられている石が遠心力でビクーニヤの後ろ足にくると勢いよく絡みついた。

後ろ足にポーラを絡ませたまま、ビクーニヤは疾走を続けるが、動きは明らかに鈍い。もうひとつの後ろ足に向けてポーラを放つとポーラが引つ掛かり、そのまま横の脚も一緒に締め上げてビクーニヤの動きを止めた。両後ろ足を縛り上げられ走ることでできなくな

ったビクーニヤは、前足をいざるように動かしたが自分の身体の重みでそれ以上進むことができずにその場に倒れ込んだ。

クシは素早く駆け寄って、一頭目の喉を斧で切りつけてとどめを刺し、さらに二頭目にも走り寄ってその体を押さえつけとどめを刺した。汗を拭いながら初めて自分で捕らえた獲物を眺めた。

神の遣いと呼ばれる神聖な動物を二頭もその手にかけてことへの罪悪感は、村の人を救ったという正当性と俊敏な動物をひとりで仕留めたという高揚感が覆い隠し、そのときのクシには感じられなかった。

この大きな獲物はあとで遣いの者をよこして皇帝の天幕へ運ばせよう。一度天幕へ戻って事の次第を話さなければ……。そんなことを思いながらビクーニヤを縛り上げ、老人のほうを振り返ったときはるか向こう側でこちらを眺めている老人の後ろに、ウルコと侍従たちが揃って立っているのが見えた。

一番の見せ場となるはずの囲い込み猟も、その日はまったく成果を得られなかった。唯一迷い込んできたグアナコにまんまと逃げられ貴族たちはみな意気消沈していた。狩りの成果は国の運命を占うことにも繋がる。貴族たちの中には狩りの不猟とは別の不吉な何かを感じている者も多かった。

ワイナがやっと捕らえた野ねずみを袋に詰めていると、リヨケがやってきて声を掛けた。

「ワイナ、クシと一緒にではなかったのか？ 囲い込み猟のときにも姿が無かったのだが……」

「はい。クシ皇子は私よりもずっと早く出発しましたが、まだ戻ってきてはいません。天幕を出る前に皇太子さまに声を掛けられ、大

物を捕まえて見返すのだと大変意気込んでいましたから」

「勇み足をしていなければいいのだが……」

リヨケの表情が曇った。

皆が帰り支度を終えても、ウルコとクシだけはなかなか戻ってこなかった。皇帝がふたりを置いて出発せよと命令したとき、クシがこちらに向かってくるのが見えた。

「クシ！」

リヨケとワイナが駆け寄ろうとしてはたと止まった。クシは両腕を後ろ手に縛られ、ウルコの側近がその縄を持って付いてきている。さらにその後ろからウルコと侍従たちがぞろぞろとやってきた。侍従たちは二頭のビクーニヤの死骸を抱えてよろよろと歩いてきた。皇帝の輿の前に来ると、クシはウルコの侍従たちによって罪人のように跪かされた。クシの横にはビクーニヤの死骸が並べられた。貴族たちは呆然と立ち尽くしたまま、その様子を見ている。

「これは一体……」

皇帝が目の前の光景の意味を理解できずに呟いた。

「こ奴は、恐れ多くも神の遣いであるビクーニヤに手をかけたのでじやいます…！」

ウルコが声を張り上げた。

「クシ、何故このようなことをした……」



皇帝はクシの凶行をまだ信じられない様子だ。

「ビクーニヤの毛を皇帝陛下に献上するつもりでした」

「それなら何故先に陛下のお赦しをいただかなかったのだ」

ウルコが腕を組みクシを見下して言う。

「このビクーニヤに畑を荒らされて困っている村人がいたのです。その退治も兼ねて捕らえようと思ったのです」

「それはこの老人か？」

ウルコは侍従が連れてきた老人を前に引き出すように命令した。

皇帝の御前なので、老人は素早く侍従たちに頭を押さえつけられた。

「皇子の言うことは本当か？」

頭を押さえられたまま、老人は苦しそうに話す。

「い、いいえ。私はこの方に獲物がある場所を教えるように脅されて……。ほかに何もいなかったため、仕方なくビクーニヤのいる場所を教えてしまったのです」

クシははっと顔を上げて俯いている老人の背中を見つめ、次にウルコを睨みつけた。

嵌められた！

「貴族の立場を利用して、なんという横暴なことを！」

ウルコが大げさに驚いてみせた。

「クシ、ビクーニヤが神の遣いであることを知らなかったとは言わせないぞ。ビクーニヤを殺せばどのような罪が待っているのかも承知であるぞ」

皇帝が静かに問いかける。クシがここで言い訳をしたとしても証拠はない。仕方なくクシは無言で深く頷いた。

クスコに帰ってきた貴族たちの列を、送ったときと同じように后や召使いたちが並んで出迎えた。

キヌアも窮屈な着物やシヨールを一日脱がずに我慢し、ようやく出迎えの時間がきてホツとしていた。

宮殿前の広場を皇帝の輿が通り過ぎ、次に貴族たちが獲物を抱えた侍従を従えてぞろぞろと通り過ぎ、宮殿の中へと入っていく。

キヌアは自然とクシの姿を探していた。

ウルコ、アマル、リヨケの一団が通り過ぎていった。リヨケが通り過ぎるときにキヌアと目が合い、眉間に皺を寄せて辛そうな顔を見せた。キヌアはさっと顔色を変え、今度は必死でクシの姿を探した。

大勢の貴族と従者が後から後からやってくる。しかしどこを探してもクシの姿が見当たらない。列も終わりに近づき、ワイナが自分で袋を抱えてとぼとぼと歩いてきた。ワイナも暗い顔でじっと俯いている。

列はひととおり通りすぎ、出迎えた人々はその後ろに付いて、祝宴に参加するために宮殿の大広間へと入っていった。広場にはキヌアとティツカだけが取り残された。

「ティツカ、クシがまだ帰ってきていない……」

「ええ、見当たりませんでした」

キヌアは広場の向こうにじっと目を凝らした。しばらくすると大通りのはるか向こうから六、七人の集団がやってくるのが見えた。近づいてくるとそれは皇帝の衛兵たちだった。ふたりの衛兵に抱えられるようにして、真ん中を歩くのはクシだ。クシは病人のように弱々しい足取りで深くうなだれて歩いてきた。

「クシ！」

キヌアが駆け寄ると、うなだれていたクシが顔を上げ虚ろな目を向けた。しかしクシに近づく前に衛兵が手を広げてキヌアを払いのけた。その三人の後から、四名の衛兵が付いてくる。彼らが担ぐ棒には手足を縛られた大きな動物の骸むくろが下がっている。その骸は二体。キヌアに気付いたクシは衛兵に両腕を掴まれたままなんとかキヌアの方に顔を向けようとしていた。通り過ぎてもキヌアの方を振り返り、何かを彼女に訴えかけようとしたが、とうとう一言も発することもなく神殿へと姿を消した。

「どうということなの？」

キヌアの声は震えていた。

「あれはビクーニヤです。ケチュア族はビクーニヤを神の遣いと崇めているのです。赦し無く捕らえたら厳しい処罰が与えられるのです。クシ皇子はほかの動物と間違えてビクーニヤを捕ってしまったんですよ」

「ティツカ、クシがそんな間違いを犯すと思う？」

「そうですね。クシ皇子に限ってそんなことはありえませんか」

「何か誤解されているのよ。誤解が解けるといいのだけれど……」

今まで見たこともないクシの弱々しい姿にひどくショックを受け、キヌアはティツカの手を強く握り締めてその場に立ち竦んでいた。

## 6、流刑

### 6、流刑

祝宴は形だけで、まったく盛り上がらなかった。狩りで起きた予想外の事件に衝撃を受けている者が多かったのだ。狩りに参加した者たちは事情を知っているが、留守番をしていたものたちは事情を知らない。しかし重々しい雰囲気には満ちているその場で理由を問う勇気のある者はいなかった。

初めて参加したクシとワイナを称える祝宴のはずだった。期待の皇子が大人の仲間入りを果たしたことを称えようと、皆この祝宴を待ち望んでいたというのに、その主役はいま罪人として神殿で尋問を受けているのだ。事情を知らない者たちも、主役の皇子の不在ということでも良からぬことが起こったのだと察することはできた。

キヌアは一応大広間に顔を出したが、気持ちは落ち着かなかった。無言で下を向いてただ時間が過ぎるのを待っていた。場を取り繕うために演じられる陽気な歌や踊りは虚しく聞こえるどころか彼女の心を苛立たせた。

クシがどこでどうしているのか、それだけが知りたかった。

やがて皇帝の傍に寄ってきた側近が何か耳打ちをすると、皇帝はすっと玉座を立ってどこかに姿を消した。

皇帝に続いてウルコが席を立ち、そのあとにアマルとリヨケも続く。ワイナも気が気でなく、もうひとりの主役にも関わらず、彼らに続いて広間を出ていった。残されたものたちはザワザワと騒ぎ出

す。キヌアはたまらなくなつて騒ぎに乗じて広間を抜け出し、ワイナの後を追つた。

彼らは間を空けて点々と太陽の神殿へと入っていく。ワイナもその中に姿を消した。キヌアがその後から神殿に入ろうとしたが、入り口を守る兵に行く手を阻まれた。

「ここからは入れません。お引き取りを」

キヌアは伸び上がつて番兵の背後を覗いたが、薄暗く静まり返つた神殿の中で何が行われているのかまったく分からなかった。諦めて神殿を何度も振り返りながら部屋に戻つていくキヌアだった。

クシは太陽の神像の前に座らされて、神官たちから尋問を受けていた。何故『神の遣い』を手にかけてのか、何度問われても答えることはできなかった。

「皇子、貴方が何の理由もなく、このようなことをするとは信じられない。正直におっしゃってください」

神官が屈んでクシの顔を覗きこみ、親身になつて説得する。

ウルコの悪巧みに嵌つたのだ。謎の老人が自分を騙したのだ

そんなことを誰が信じるだろう。あさましい嘘で罪を逃れようとすると何と情けない人間なのだと思われて、クシの自尊心が傷つただけだ。どちらにしろ有罪になるのなら、下手な言い訳をして見苦しい姿を見せるのは止めよう。

クシはどんな罰でも受ける覚悟を決めた。

「すべては神のご意志に従います」

「皇子……」

説得していた神官は残念そうに目を閉じてため息をつくとき、クシの前から退いた。

ちょうどそのとき、皇帝が側近たちを従えて神殿に入ってきた。ウルコがその後を付いてくる。少ししてアマルとリヨケが足早にやってきて、遅れてワイナが飛び込んできた。クシは兄たちとワイナの姿を見て少し緊張が解けると同時に、急に弱気になっていくのを感じた。思わず縋るような目を兄たちに向けていた。

神像の許に立った皇帝に神官が今までの経過を告げる。クシが何も語らないと聞いて皇帝はクシに厳しい眼差しを向けた。

「理由もなく神の遣いを殺したとなれば、死罪。クシは手柄を立てたいという自己満足からビクーニヤに手をかけた。弁解の余地もない」

皇帝の横に立つウルコはわざと気難しい顔を装ってそう言つと、自分で何度も頷いた。

「理由なら、心当たりがあります」

突然アマルが声を張り上げた。

「もうすぐシトウアの大祭　　春分の厄払いの祭り　　があります。」

クシは兼ねてより大切な行事を迎える前に、皇帝陛下に上等な織物を差し上げたいと申しておりました。そこで狩りに出た際には是非立派なビクーニヤを仕留めようと考えたのだと思います。陛下がお召しになる織物を作るためにビクーニヤを捕ることは赦されるはずですから。

本来なら先にお許しを請うべきでしたが、まだ若い弟は果たしてうまくビクーニヤを仕留めることができるかどうか自信が無かったことと、陛下をご存知ない方が喜んでいただけるとは思えないかと考えたのでしよう。そこは若さゆえの無知とお許しください」

クシは驚いた顔でアマルを見つめた。クシと目が合うとアマルは深く頷いた。

「そ、それならそれで、何故自分で申し開きをしなかったのだ！嘘について誤魔化そうとしたのは何故だ！」

アマルの進言は予想外の出来事で、ウルコは動揺して叫んだ。

「行動してしまっただあとで事の大きさに気づき、気が動転してしまっただけでしょう」

「は。なんとでも言えるわい。そんな理由で赦される罪ではないぞ！」

ウルコは興奮してアマルに食って掛かる。クシはそんなウルコの姿を憎しみを込めて睨みつけた。

こんな状況でなければ、殴りかかっているとこころだ！

クシは唇をきつく噛んで怒りを必死で抑えていた。



「ウルコは黙っておれ」

皇帝がやっと口を開いた。まだアマルに何か言っていてやろうと思っていたウルコは、グツと喉を鳴らしてやっとのことで言葉を飲み込んだ。

「クシ、お前がビクーニヤを余に差し出したいという気持ちであったことはよく分かった。

しかし、市民を脅したり、罪を問われて嘘をついたことは赦されん。さらに神聖なビクーニヤはいかなる理由であろうと黙って手をかけてはならないのだ。

本来ならば死罪だが、お前が若く無知であったことを考え、最果ての地に流刑とする。

期間はリュウゼツランの苗が生長し、花を咲かすまで……」

リョケとワイナが同時に息を飲む声が神殿に響いた。

サボテンの一種リュウゼツランは生長して咲くまでに十年以上掛かると言われている。極刑は免れたものの、それに次ぐ程重い罪であった。

ウルコは、極刑まで追い詰めてやることはできなかったものの、邪魔者のクシを遠くに追い払うことができるかと心の底でほくそ笑んでいた。十年あれば自分が王座を継ぎ、クシなどに大きな顔をされることもなくなるのだ。堪えきれずに思わず笑みが浮かぶ。

皇帝は簡単に判決を申し渡すと、すぐに神殿から出て行ってしまった。ウルコも慌ててその後を追った。

皇帝が去ってしばらくすると、罪人には変わりないクシは、衛兵に縛られた腕を乱暴に引き上げられて立たされた。立ち上がったクシはアマルの方を向き、力なく頭を下げた。

「兄上、私を庇ってくださいって、ありがとうございます」

アマルは俯いて大きくかぶりを振った。

「一体……どうしてこんなことになったのだ……クシ……」

アマルの言葉は溜め息に混じってほとんど聞き取れない。

「クシ！ ウルコの策略だろう。何故正直に言わなかったのだ！」

リヨケがクシに飛びつこうとして衛兵に止められた。

クシは兄たちの方から正面の神像に視線を移し、キツと睨みつけた。

「今は何も言うことはできない。しかし私は必ず帰ってきます」

クシの強い決意を感じさせる表情を見て、兄弟とワイナは、少しだが心配が和らいだ。

「クシ皇子！ 私は正式に辺境の警護兵に志願する。そして皇子のいる場所まで頻繁に会いに行くからな！」

引き立てられるクシにワイナが必死で声をかけた。クシは微笑んで頷いた。

乾季の空はどこまでも澄み切った藍色をしている。幾筋もの筋雲が空に縞模様を描いていた。

クシが西の最果てに出発する日だ。

出発に先立って、宮殿の中庭の片隅に刑期を計るリュウゼツランの苗が植えられる。皇帝と神官とクシがそこに立ち会った。

そのときクシは、回廊の柱の向こうからその様子を眺めているウルコの存在に気付いた。ウルコの横に従えている侍従たちの中に派手な首飾りと羽根冠を付けた呪術師がいた。目の良いクシは、その呪術師の目の横に大きなホクロがあるのを見つけた。それは間違いなくビクーニヤを捕まえてくれと頼んだあの老人だ。

今更気付いてももう遅い。罪の確定したクシには何も訴えることはできない。ウルコはそれを知っていて、わざとクシに見せ付けているのだ。ここで動揺してはウルコの思うつぼだ。クシはいっさい表情を変えず、ふたたび植樹の作業に視線を戻した。

宮殿内の誰もが目にする中庭にクシの運命を決めるリュウゼツランが植えられ、誰も掘り返すことができないように、周囲には太い木の杭がびっしりと立てられた。

数人の衛兵に付き添われて、クシはいよいよ最西の僻地に向けて出発する。

荷物は当座の食糧以外はほとんどなく、粗末な麻の服に巻かれた細い帯に小さな斧を挿すことだけが赦された。耳にはめられた金板も抜き取られて、クシが皇族であることを証明するものは何も無くなった。

貴族たちが大勢クシの見送りに詰め掛けたが、言葉を交わすことは禁じられているため、黙ってクシが通り過ぎるのを見ていた。

宮殿の門を出る間際、クシがもう一度名残惜しそうに宮殿の中を見回すと、柱の陰からじつとこちらを見つめているキヌアの姿を見つけた。

そこに居たのはあの勇ましいキヌアではなく、蒼ざめて今にも泣

き出しそんな顔をした弱々しい女性だった。彼女は、そうしていなければ倒れてしまうのではないかと思うほど頼りなく、柱に全身を預けて立っていた。

『短い間だったが、師として尊敬し、姉のように慕った人……』

クシは、門を出てその姿が見えなくなるまで、キヌアを振り返って目を離そうとしなかった。

広場にクシが姿を見せると、人々がどつと押し寄せて自分のことのように嘆いた。

約一年前、成人の儀で勇者として賞賛された皇子が、今度は一転、罪人となって人々の前に晒されているのだ。ほとんどの市民がそれを信じることができなかった。どこからかあの時と同じ掛け声が湧き上がってきた。

「アウキ・クシ！ アウキ・クシ！」

「止める！ 止めるんだ！」

衛兵が掛け声を止めさせようとすると、ますます声が大きくなった。

衛兵は群がる人々を乱暴に払いのけて道を作ろうとするが、人の波は次から次へと容赦なく襲いかかってきた。もみくちゃになりながら、衛兵たちはようやくクシをクスコの郊外に連れ出すのに成功した。

クシが去ったクスコの街からは相変わらず人々の喚声が響いている。多くの人が自分を呼ぶ声を背に受けながら、クシはこの都に必ず戻ってくるのだと決意を新たにした。



## 6、 流刑（後書き）

リュウゼツランは日本では数十年から百年に一度開花すると言われていますが、気候によって十年あまりで開花するのだそうです。

## 7、呪われた部族

### 7、呪われた部族

冷たい石壁と湿った石の階段は暗い地の底へと続いていく。先は漆黒の闇でどんなに目を凝らしても何も見えない。少年は肩に担いだ大きな麻袋の口を片手で握り締め、もう片手で石壁の肌を伝いながら闇の中へと下りていった。足に伝わる感覚だけを頼りに階段の終わりを確かめて、下り立った地下通路をさらに奥へと進んでいく。通路の遙か先に仄かに明かりが見え、ようやく自分の目指す方向に見当をつけることができた。

果たして明かりの灯ったその場所には壁を大きく抉って作られた空洞があり、通路とその空洞を仕切るように何本もの木の杭が立てられて、杭の隙間には鋭い棘を持つ蔦が張り巡らされていた。手前の壁に掲げられているたいまつのも明かりも絡み合った蔦に邪魔されて空洞の奥にまで届いていない。木の杭の向こう側は真っ暗でその中に何が潜んでいるのかまったく分からない。

少年は空洞の前に麻袋を置くと中から蠟の塊のようなものを取り出した。そして松明の炎の下にそれをきつく縛り付けた。その塊は動物の脂身を乾燥させたもので、そうしておくことでやがて括りつけた燃料に火は燃え移っていき、松明は絶えることなく燃え続けるのだ。

それが済むと少年は、空洞のほうに向き直って声を張り上げた。

「おばさま、変わりはないか？」

ややあって、空洞の闇の中から微かにしわがれた声が響いてきた。

「ああ、哀しいことに、何の変わりもない」

続けて自嘲するような嗤い声が聞こえてきた。

「今日はご馳走だ。干し芋に干し肉もあるぞ」

麻袋を探りながら少年が得意げに声を張り上げる。

「また首領の館から盗んできたのか」

「人聞きの悪いことを言うでないよ。首領さまは遠征に出ていなさるので処分に困った食料を片付けてやったのさ」

そう言いながら少年は、立てられた杭の上の方に僅かに開いた隙間めがけ、大きな木の葉で包んだ食料を次々と放り込んだ。食料が投げ入れられるやいなやそれを開こうとするガザガザという音が響いてきた。

しばらく包みを開いてはムシャムシャと頼張る音が響いていたが、やがてそれが止むと再び空洞の中の声が少年に語りかけてきた。

「いつも済まない。情けないことにこんなことになっても腹は減るものだ」

「当たり前だ。おばさまは神でも何でもなし。人間なんだから」

「そう言ってくれるのはそなただけじゃ。ほかの者たちは私のことを飲まず食わずでも生きていける特別な存在だと信じている。私は未来を見通すことができるだけじゃ。それなのにいつのまにやら、



私が予言することで事が起こるのだと思い込むようになった。良いことなら喜んで信じるが、悪いことを忠告すれば私が悪いことを引き起こすのだとして疎まれる。その結果がこれじゃ！」

暗闇の中から響く老婆の声が怒気を孕んだ。

「首領たちに何を言ったの？ おばばさま」

「何も……。見たことを伝えたままでのこと！ しかしそれには救いの手段も付け添えたはずじゃ！」

今の凶行を続けておれば、やがてわれらを滅ぼす者が現れるであろうと……。われらは昔のようにこの地で必要な獲物を仕留めて暮らしていくのが道理なのだ。われらほどの大部族が周りと争わずして繁栄していくのは少々無理な話であろうが、せめて罪もない民を捕らえてきて生贄に捧げることは止めなくてはならないとな。そうでなければ必ずわれらは滅ぼされる。

……。いや、子どもに向かつてする話ではなかったな」

「子どもじゃないやい。おいらは今度、大首領さまの軍に付いて戦に出るのだからな。ああ、もちろんちゃんとした戦だ。小さな村を襲って人をさらってくるのではないよ」

「はて、今はもうこの大国と戦おうという度胸のある部族など、この辺りには存在しないはずじゃが……」

「日の昇る未知の大地に向かうのだ。日の昇る地の果てには大変な富を湛えた国があるという噂だ。その過程に陣を作るため、道中に存在する部族を征する戦なのだ」

「ほうか……。それで得心がいった。新たな戦いの武運を祈るために

盛んに生贄が集められていたのじゃな。日の昇る大地……首領たちの目当ては東の征服か」

「おいらが戦いに出る前におばさまを出してやらねば、おばさまは飢え死にしちまう」

「ああ、心配はいらない。そなた以外にもときどき世話役の少年がやってくる。油粕のようにふやけた雑穀を持ってな……。首領たちも私が死んでは困るのだ。それに万が一のために今までお前が持ってきてくれた食料を少しずつ蓄えておいたのだよ」

「しかし、首領たちが新たな戦争に出ていってしまったら、おばさまのことなど忘れられてしまふよ」

「私を誰だと思っておるのじゃ。長年この部族の命運を占い、ここまで導いてきた呪術師キータであるぞ。愚かな首領たちよりもこの国のことを知っている。そして未来の姿も。私にはこの場所から出て、新たな世界へと旅立つときがやってくる。しかしな、それはわれら一族が滅びるのと時を同じくすると天は告げた。もしも私の先読みが誤っているのであればそれは幸運なことだ。私は喜んでこの命を捧げようぞ」

「何と恐ろしい予見だ。だから首領たちは聞き入れたくなかったのだよ。おばさま」

「恐ろしいのは自分たちの力を過信してこの大地に恐怖を撒き散らしている首領たちの奢り高ぶった心じゃ。分相応に生きねばわれらは神さえも敵に回すことになる。やがて神々を味方につけた大きな敵が現れることであらう……」

「神々を味方に付けた大きな敵……。それはどこの部族だ？」

「さあ、そこまでは知り得ない。われらが無用な戦いを挑んでいけばやがてその敵と対峙するときがくるであろう。」

……東の地か。どうもその辺りに不穏な空気を感ずるがな。

それにしても、少年。お前はなかなか聡明な子じゃな。こんな年寄りの戯言たわぶによく耳を貸してくれることよ。この罪人にただ食事を運ぶだけの役目であったのであろうに」

「おばさまの話は戯言などではない。おいらの親父さまはおばさまの予言は正しいと言っている。それを聞かないいまの首領たちがおかしいのだと。」

どうかおばさま、おいらが戦から戻るまで生きのびておくれよ」

鳶の向こうの暗闇から石壁を震わせるような高らかな笑い声が響いてきた。

「なんと頼もしい若者じゃ。ばば、ばばと呼ぶがな、私はそれほど耄碌もろくしてはおらん。大首領に従えている大呪術師よりはずっと若いのじゃ。まだまだ何年でも生き延びていくぞよ。」

ところで、そなた名は何と言ったかのう」

「アンコワリヨだ」

「ほうか……。そなたとは何やら深い縁を感じるぞよ。お前こそ戦地より必ず生きて戻るのだぞ」

少年は「必ず」と力強い声で返事をする、空になった麻袋を掴んで地上へと戻っていった。

彼は年若い、がっしりとした体格と逞しい手足の持ち主である

ことを、このときの老婆は知り得なかったが、やがて彼が自分を救う存在になるであろうことは確信していたのだ。

「われらは呪われた運命から抜け出すことができるであろうか……」

深い闇の中で感覚だけを頼りにめぼしい小石を集めて、それを一筋に並べると、小声で何かを唱えながら、老婆は己と己の一族の運命を占い続けるのであった。

## 8、西の果て (その1)

### 8、西の果て (その1)

荒地は果てしなくどこまでも続いている。石ころの転がる大地に、強い風に運ばれた枯れ草の束が転がっていく。食べ物になりそうな植物も動物も、どこにも見当たらない。

植物といえば、蜘蛛の足のように地を這うアロエの一種や空に向かって高くそびえるサボテンが、ところどころ唐突に地面から生えているだけだ。

クスコを中心として栄えているのはほんの僅かな範囲でしかない。村々が密集する地域を外れてさらに西へ向かえば、そこは一面の荒野であり、人が暮らす集落には数日間歩き続けてもたどり着けるかどうか疑わしい。そもそもその土地に人が住めるのかどうかさえ分からないのだ。

その一帯も一応はケチュア族の支配する領域とされているが、国によって特に管理されているわけではない。

その昔、アヤルマカという大部族が治めていた広大な地域を、先代の皇帝がかの大部族を征服したことをきっかけとして領土に取り込んだのだ。しかし今では都からの警護兵が忘れかけたところに時折巡回にやって来る程度で、それ以外は都の目の届かない辺境の地である。

神々が住まうといわれる高く美しい峰が連なる山脈の、その懐に抱かれた風光明媚な高地クスコとは天と地ほどの差がある。乾いた荒野が果てしなく続くその土地はまさに死の大地である。人が暮ら

すには大変酷な場所だ。

クシに課せられたのは、その辺境に自力で生きる場所を見つけ出し、何時とも知れない刑が解かれるその日までただひたすら生き抜いていくという、単純でありながら最も過酷な試練である。

クスコからの道はとつくに途絶えた。クシが逃げ出さないようにと、彼の両脇をしつかり抱え込んで引き連れてきた兵士たちは、道が途切れた途端、ひび割れて使えなくなった土器を投げ捨てるようにクシを突き放し、さっさとクスコへ戻って行ってしまった。

かろうじて数日生き延びられようかというほど僅かな食料と、氷点下にもなるこの土地の夜の寒さにはほとんど役立ちそうにない薄い毛布を投げ与えて……。

役に立たない自尊心など捨てて、兵士たちに哀願し縋りつくように後を追う方法もなかったわけではないが、それならば潔く死を選ぶのがクシである。

あれから何日この荒野を彷徨っているだろうか。

終わりの見えない地平線に向かって歩き続け、枯れ草に溜まった朝露で喉を潤し、夜は地面を掘って寒さをしのぎ、何とかクシは生き延びていた。

ここはまさに地の果てだとクシは改めて実感した。語り部の語りや、父王とともに遠征に出てこの地を訪れたことのある兄たちの話に聞いてはいたが、他人から聞く話は所詮絵空事であり、自らの足で踏みしめているこの大地とそれとは全くの別物であった。

すべての物をさらって吹きすさぶ風は、空腹でふらついているクシの身体を一気に空へ舞い上げようとする。クシは這い蹲るように重心を低くして脚を踏ん張り、風にさらわれるのを堪えた。風に逆らって進もうとするものの、どうやら後ろに押しやられているよう

だ。

西の果ての異国との境界辺りにひとつ村が存在すると聞いたことがある。唯一の頼みであるその噂を信じてそこを目指すしか方法はないだろう。当てのない目標に向かってひたすら歩き続ける。

『本当にそんな村など存在するのだろうか？』

そもそも流刑などとは建前で、実は自分がこの荒野でのたれ死ぬことを期待して、この罰が下されたのではないだろうか？』

厳しい環境に晒され続け、日を追うごとにクシの心は疑念でいっぱいになっていった。

数日間荒野に吹き荒れた砂嵐が止んだとき、地平線に近い遙か彼方に一筋碧い線が見えてきた。クシの歩調に合わせ茶色一色の地面に時折濃い群青色が見え隠れする。近づくとついにその筋は幅を増し、やがてかなりの広さを持つ碧い大地となってクシの前に姿を現した。脚がもつれ思うように速く歩けない。片足を引きずるようにして、それでもクシは残る力を振り絞り、ようやくその蒼のふちへと辿り着くことが出来た。

「水だ！」

そこには平原の真ん中にぽっかりと口を開けたような広い湖があった。

空よりも深く濃い群青の上に時折風が吹き渡り、無数のさざなみを作って水面を白く染め変える。そして通り過ぎればまた、深い藍色は雲を映して沈黙した。美しい光景よりもまず、クシはその豊富な水に心が躍った。

クシは湖の入り江にジャブジャブと入り込み、水を手で掬っては頭から浴びた。何日も荒野を彷徨っていた身体には固まった砂が厚くこびり付いており、流れ落ちた泥砂が足許の澄んだ水を濁らせていった。全身に水を浴びぐっしりと濡れても、荒野の乾いた風はあつという間に乾かしてくれる。

汚れを落として喉の渴きを潤すと、今度は猛烈な飢えを感じた。

湖の周りには緑の草や背の低い木が茂っていた。木や草の中には小さな実をつけているものもあり、草や実をひととおり口に含んでみる。あまり美味くはないが何とか食べられそうだ。クシは夢中になってそれらを漁った。

こびりついた汚れが落ち、腹が落ち着くと、それまでクシの心を覆っていた怖れや疑念がいつの間にか消えていた。

クシは誰もいない広い湖に向かって大きく手を広げると、叫んだ。

「私はもう皇子ではない。この地で自由に生きていくのだ！」

そう決意した途端、クシの心は軽くなり、新たな希望が湧いてきた。

湖のほとりは湿気を帯びた心地よい風が吹いているものの、その日差しは刺すように鋭い。強い日差しをよけるため、灌木の茂みに顔を潜らせて横になる。すると今までの疲れがどつと襲ってきて、彼を深い眠りに引き込んでいった。

まどろみの中で何故か鮮明にキヌアの姿が浮かんできた。あの強く逞しい彼女が、幽魔のように蒼白い顔で自分を見つめている、宮殿を出るときに見たあの姿だ。



彼女の痛々しい姿に目を伏せようとする一方で、不屈の精神をもつ彼女が自分のために嘆く姿に快感を覚えている自分がある。

夢とも現実ともつかないその世界で、クシは自分の心の奥底を知った。

そうか。武術を教わろうなどとは建前で、その実は単に彼女と居られる時間がほしかっただけのだ。私は彼女より強くなることで彼女に認めてもらおうと必死になっていたのだ。だからあのとき、彼女が私との別れを嘆いてくれたことで私の心は満足している

「今更……愚かなことに気付いたものだ……」

眼を閉じたまま、うわごとのように呟いて、やがてクシは深い深い眠りに落ちていった。

## 8、西の果て（その2）

どのくらいの時が経っただろうか。

誰かに服の裾を引っ張られているような感じがした。まだうつらうつらとしながら無意識に手をやって裾を戻すが、何者かがまた引っ張り返す。

クシは異様な気配にはっと目覚め、足元に視線をやった。真っ白なりヤマが枝の間から覗き込んでいた。食べ物と勘違いしているのか夢中でクシの服の裾をかじっている。

「うわっ！」

驚いて飛び起きようとして、低い木の陰で寝ていたクシは覆いかぶさる木の枝で顔を傷つけた。同時にリヤマの方もクシの声に驚いて一瞬飛び退いたのだが、またすぐに寄ってきて服の裾をかじり始める。クシは夢中でそれを払いながら、何とか木の陰から抜け出そうと背中ではざった。

「××！ ××××……」

枝の向こう側から人の声が響いてきた。声の主は近づいてきてリヤマの首に手をかけると、その身体を一所懸命引っ張っている。しきりに何かを叫んでいるのだがクシにはその言葉が理解できない。クシは、今居る地がクスコの言葉が伝わらない辺境であることを改めて悟った。

リヤマがようやく外へと引き出されて、解放されたクシは茂みを抜け出した。そこには、抗うリヤマの首に縄をかけているひとりの少女がいた。リヤマの首を縄で引き寄せ必死に押さえながら、少女はクシを振り返って怪訝な顔をした。

クスコの周りでは見かけない服装だ。厚手の毛織物を幾重にも着て、頭に丸い頭巾を被っている。この辺りの強い日にやかれたためか、肌の色は暗褐色でところどころ表皮が剥けた痣がある。

クシが立ち上がると、驚いて一歩下がった少女は、威嚇しているつもりなのか険しい顔で何かを必死に叫んだ。それもそうだろう。見慣れない服を着た薄汚い男が茂みの中からぬうつと現れたのだから。

「xxxxx!」

大声で叫ぶ少女に気付いて、今度は向こうから中年の男が慌てて駆けてきた。

色鮮やかな模様を編みこんだ耳あて付きの毛編みの帽子を被り、腰まで隠れるような毛織の貫頭布を羽織っている。男は少女よりもずっと日に焼けて黒々とした顔をしていた。

ふたりはどことなく顔つきが似ているので親子と思われる。何も持たずに湖のほとりに倒れていた男を怪しげに思っているのだろう。ふたりとも詮索するようにクシの頭から足先まで何度も視線を往復させた。

「この辺りに村があるのか？ 私は行くところがない。あなたたちの村に泊めてくれないか？」

言葉が通じないことは分かっていたが、クシは何も持っていないという身振りを交えて、とりあえず親子にそう頼んでみた。

クシが必死に訴える姿を見て、親子は顔を見合わせ、あれやこれやと相談し始めた。

まずはクシの言った言葉の意味を議論しているのだろう。随分と時間をかけて話し合ったあと、ようやく二人はクシに向き直って笑顔を見せた。

クシの言葉を正しく理解できたかどうかは分からないが、気持ち  
は通じたようだ。父親と思われる男がクシの肩をたたいて『付いて  
来い』というような仕草をした。

クシが男に付いて歩き出すと、その後ろからリヤマの首にかけら  
れた縄を引きながら、少女が付いてきた。

クシが振り返ると少女はニッコリと笑みを返した。少なくとも怪  
しい男という誤解は解けたのだろう。クシはホッとして少女に微笑  
み返すと、また前に向き直って歩いていった。

湖のほとりに沿って向こう岸まで歩いて行き、その先にある小高  
い丘を上っていく。丘の頂上から下ろうとしたとき、クシは思わず  
声を上げた。

丘を下ったその先に、一面を丈の短い草が覆う広大な緑の平原と、  
そこでのんびりと草を食むリヤマの群れを見た。今まで彷徨つてき  
た乾いた荒地とはまるで違う光景だ。

広い野原にはぼつんぼつんと泥レンガを組み合わせて造った家が  
点在している。

リヤマの群れの中にそれを追う人の姿も見えるが、人の数よりも  
リヤマの数のほうが圧倒的に多い。リヤマの群れの中に立つ人たち  
は、群れを外れたリヤマを追っては再び群れの中に返していく。

彼らはどうやらリヤマを放牧しながら暮らす遊牧民らしい。

クシを見つけた少女はおそらく、丘の向こうまで冒険に出しま  
ったリヤマを連れ戻しに来たのだ。帰りが遅いことを心配した父親  
も一緒に丘を越えてきたのだろう。

群れからはぐれた悪戯なリヤマのお陰でクシは命拾いをしたのだ。

男は点在する泥レンガの家のひとつに入って行った。クシが入る  
のを躊躇っていると、後ろから少女がクシの背中を押して中に入る  
ように勧めた。

中は薄暗く、明るい外から入った瞬間は目が眩んで何も見えなかった。目が慣れてくると、家の奥に少女と同じくらいの年の少年がひとり座っているのが見えた。少年は竈かまどに火をくべて食事の支度をしている。竈の上で炙られた肉の香ばしい匂いが家中に漂っていた。

クシの腹がそれに反応してぐぐつと音を立てた。少女はそれを聞いてくすぐすと笑うと、竈の肉を土器の上に載せてクシに勧めた。クシの体は思うよりも早く動いて肉にかぶりついていった。もうなりふりなど構わない。ちぎれそうな空腹を満たすことだけしか考えられなかった。

幼い頃から皇族として厳しい躰を受けてきた自分にもこんな原始的な本能が残されていたのかと、心のどこかで驚いている自分がいた。しかし他方で何が何でも生き抜こうとする強さを残していた自分を頼もしく思った。

空腹が満たされて、改めてクシは自分が今いる場所を観察した。四方を土壁で囲い、天井には藁が葺いてある小さな家。空気抜きの高窓から細い明かりが差し込むだけの狭く薄暗い空間には、隅に小さな竈があり、反対側には備蓄の食料が入った袋が積まれている。その間の藁と毛織の敷物が敷き詰められた床に、寄り添うように親子三人が座り、膝を突き合わせて無言で肉をかじっている。その中に自分も幅を取っているの、家の中はいっぱいだった。人の良さそうな父親と負けん気の強そうな少女、そして少女と瓜二つだが、彼女よりも気の弱そうな少年。二人はおそらく双子なのだろう。何故かそこに母親の姿は見当たらなかった。

食事が済むと、少女がクシの肩を叩いて呼んだ。意味の分からない

い言葉でしきりに何か言っている。クシは首を傾げて少女の動きを観察した。だんだんと少女の言おうとすることに察しがついてきた。少女は自分の胸を何度も叩いて繰り返している。

「オルマ、オルマ……」

そう、それは彼女の名前だった。クシが少女に頷くと、今度は父親と少年が順に胸を叩いて名乗った。

「ポ」

「チャキ」

初めて通じた異民族の言葉にクシは嬉しくなり、自分も胸を叩いて告げた。

「クシ！ クシ！」

すると三人の親子は顔を見合わせた。クシがもう一度名前を告げると、少女がプツと噴き出した。あとのふたりもそれに続いて笑い出し、やがて三人はお腹を抱えて笑い出した。

驚いたクシは何か可笑しなことを言ったかと慌てた。しかし親子は構わず笑い続ける。彼らの言葉を話せるようになるまで、彼らにとって何が可笑しいのかクシには知ることはできない。未知の地で生きる難しさをそんな些細なことで実感するクシだった。

クシのいなくなったクスコでは、今までと変わらない日常が流れ

ていた。

キヌアの教室も毎日開かれて子どもたちも熱心に指導を受けている。成人の儀を控え張り切る少年たちに影響されて、キヌアの指導にもますます熱がこもっていた。

そのキヌアが部屋に帰ると、ひとり涙が枯れるほど泣いていることなど、誰も想像しなかった。一番傍にいるティツカだけが、日に日にやつれていくキヌアを心配していた。

クシがキヌアに武術の指導を申し入れたお蔭で、このクスコでもキヌアは居場所を見つけることができたのだ。そのクシを失ったことでキヌアの心は拠り所を失くしてしまったのだらうとティツカは考えた。

しかし帰るあてのない人を待ち続けるのは辛すぎる。

ティツカは、キヌアが武術の指導に夢中になることでクシを忘れてくれることを願っていた。

クシがクスコを去ってからだいぶ経ったある日、ティツカがキヌアの部屋に慌てて飛び込んできた。

「キヌアさま、大変です。今晚、お部屋に皇帝陛下がいらっしやるそうです。」

早くお支度をしないと……」

ティツカは衣装籠をひっくり返してあれこれと選び始めた。相変わらず武術の指導ばかりしているキヌアには適当な服がない。

衣装をほとんど籠から出して、一番底には見事な織りのシヨールと頭巾が残った。

「キヌアさま、さすがにこれはまずいですよね」

ティツカがおずおずとそれを広げて見せた。

「これはクシのお母さまの……」

キヌアはそれをティツカから受け取ると、懐かしそうに眺めた。

「クシさまにお借りしたまま返せずに……」。

私たちでのお部屋に返しに行くのは難しいですね。黙って入ったことが知れたらどんなお咎めを受けるか分かりませんもの」

「ティツカ、これはこのまま仕舞っておきましょう。クシが帰って来るときまで」

キヌアはそれらの着物を丁寧に畳むと、籠の底に大切に収めた。

「別に着飾らなくていいのよ。無理に作っても仕方ないでしょ？  
これからずっとお傍にいるのだから。いま着ているものでいいわ」

キヌアは、散らかった服を畳んでその上に重ねながら言った。

「では、せめて御髪おみかみを整えて香油を塗るだけでも」

ティツカは慌てて準備を整えると、いつも束ねて絡まっているキヌアの癖毛をほぐし始めた。

「キヌアさま、良かったですね。」

クスコに来た意味が見出せず、さらに懇意にしてくださいさったクシさまが居なくなられて沈んでいらしたので、心配だったんですよ。

皇帝陛下がキヌアさまをお后と認めてくだされば、それこそキヌ



アさまがここに来られた意味があるというもの。立派にお役目を果たすことができますもの」

「……そうね」

キヌアは少し口の端を上げて笑ってみせるが、その表情は固かった。ティツカは婚礼の日以来会うことのなかった皇帝の突然の訪問にキヌアがひどく緊張しているのだと思った。

「そうですね！ お母様…… 『天の女王』 さまもお喜びになります！」

キヌアはまだ強張った表情のまま軽く頷いた。

日が落ちると、数人の侍従を従えて皇帝がキヌアの部屋に姿を現した。キヌアが挨拶を済ませると侍従もティツカも速やかに部屋を引き上げていった。

まだ腰を低くして頭を下げてたまま畏まっているキヌアに近づくと、皇帝は彼女の顎に手を伸ばして持ち上げ、彼女の顔を自分に向けた。婚礼の日に大広間で挨拶をして以来、全く顔を合わせる事がなかったので、キヌアが皇帝の顔を間近で見るのも初めてだ。

キヌアの婚礼が決まった途端、これまでキヌアの戦士としての技術と精神力を鍛えることだけに腐心してきた彼女の教育係たちは、俄かにクスコ風の女性としての振る舞いを身につけさせることに執念を燃やし始めた。

普段の彼女の行動をすべて否定されることから始まったその躰は戸惑うことばかりで、何度も逃げ出してはまた連れ戻された。

しかし、それはまだ序の口だったと彼女が知ったのは、最後の教育が始まったときだった。

まだ若い王女は、側后として何を為すべきかということを一から覚えねばならなかった。

今までの生き方を変え、屈辱にも耐えて、ひと通りのことを身に付けたというのに、クスコに来てみればその大役を果たす機会は与えられず、ただ漫然と時を過ごすことしかできなかった。ようやく本来の役目を果たす時が来たのだ。

キヌアは仄暗い松明の明かりに照らし出されている皇帝の顔をじっと見つめた。

僅かにクシに似てはいるが、深い皺を刻んだその顔は、弱々しく憐れな老人にしか映らない。かつてはその名を聞けば誰もが震え上がると言われた勇猛な皇帝の面影はどこにも感じられない。

キヌアの顎を持ち上げているその指も細く骨ばって血が通っていないのではないかと思うほどひんやりと冷たい。

皇帝は、顔を近づけて彼女の瞳を覗き込むようにして言った。

「間近に見ればなんと似ているのだ。そなたは母上にそっくりだ。

野蛮な娘かと思っていたのは、余の大きな誤りであった」

そう言うときヌアの身体を抱きかかえ、甘えるように縋りついてきた。

キヌアは背筋に水が走るような嫌悪感を抱いた。

擦り寄る皇帝の身体を受け止めながら、クシと無邪気に合わせ稽古をしていた日々をありありと思い返していた。



## 9、流浪の民 (その1)

### 9、流浪の民

クシが西の地で暮らし始めて、もうすぐ季節が変わろうとしていた。その頃にはリヤマの放牧をする民の中にも少しずつ溶け込めるようになっていた。

どこか遠い地からやってきた謎の少年を、放牧民たちははじめ、物珍しく少し怖いものでも見るような目で遠巻きに眺めていたが、本来気さくなその民は、いつのまにか昔からの仲間のようになりに親しげに接するようになっていた。

やがて誰も彼もがクシに興味を持って話しかけてくるようになり、クシがこの民の言葉を理解するようになるまでにそれほど時間はかからなかった。

そのうえ少しおせっかいなオルマが発音から細かい言い回しまで厳しく教えてくれるので、クシの覚えは格段に早かった。

彼らは自分たちのことを『ロハ』と呼んでいた。

オルマ親子がクシの名前を聞いて笑った理由もほどなく分かった。ロハの間では、『クシ』というのは、【くしゃみ】のことだったのだ。

慣れ親しむようになってからも、いや親しくなれば尚更、彼らはクシのことを、わざと【くしゃみ】の意味の方の発音で呼んだ。からかい……というよりも、もう自分たちの仲間だという親愛の情を込めてそう呼んだのだ。だからクシのほうもそう呼ばれて悪い気はしなかった。

宮殿で家来に傳かれて生活していたときよりも、気の置けない仲間と暮らしている今の生活のほうをクシは気に入っていた。

オルマとチャキの双子は、男女が入れ替わったかのように性格がまるで逆だった。オルマは男勝りで体力があり、父親とともにリヤマを追うのは主にオルマの仕事だった。一方、チャキはあまり家から出ずに、家事をしたり、リヤマの毛を紡いだりしていた。

オルマはクシに、まるで男同士の親友のように接する。

「【くしゃみ】は気持ちのいい奴だな。街の方から来たというから最初はすました嫌な奴かと思ってた」

「オルマも女とは思えないほどさっぱりしている。チャキのほうがよほど女らしい」

「きつと神さまはあたしらに付けるものを取り違えたのさ！」

あっけらかんとして言う、オルマは豪快に笑った。日にやけた顔に白い歯がやけに目立つ。

オルマとは特に気が合うのか、彼女といるだけでクシは心から楽しかった。リヤマを追いながら、一日中二人は笑い合っていた。

しかし放牧民の生活は気楽で楽しいばかりではなく、むしろ危険に晒されることが多い。平原とはいえ、ところどころに地の裂け目があり、リヤマとともにそこへ滑落して命を落とすものもいたし、夜になるとリヤマを狙ってくるピューマなどの猛獣を追い払わなくてはいけなかった。

クシはそこに暮らすうちに自然と危険を察知する感覚が研ぎ澄まされていった。

やがて平原の草が霧雨で湿る季節になった。乾季の終わりに毛を刈り取ったリヤマたちを放ち、口八の民は移動をするために家の荷物をまとめ始めた。

「いったい、どこに行くのだ？」

「雨季は谷間に下りて作物を育てるんだよ」

ポコが半年間眠っていた木製の足踏み鋤を一本一本磨きながら言った。

「リヤマたちは？」

「この季節は野生に返す。乾季になったら戻ってきてまたリヤマを集めるのだ」

彼らはこの平原に定住しているわけではなかった。季節ごとに場所を移動し、生活に必要な物を育てたり、集めたりしながら生活しているのだった。

クシにとつては不思議なことばかりだ。

「【くしゃみ】には珍しい生活だろ？」

谷間の暮らしは忙しいぞ。必死で働かないと半年間食うものが無くなってしまうからな」

オルマはたくさんの干し肉を袋に詰めていた。チャキは前の年に採れたとうもろこしの種を丁寧に選別している。

「今年はうまく育つかな？」

チャキが呟いた。

「去年は本当にひどかった。種に残す分を取ったら食べる分は僅かしか残らなかった」

「虫にやられてしまったからな」

食べ物もろくにならない半年をどうやって生き延びてきたというのか。リヤマの干し肉を分け合ってようやく暮らしてきたのだろうか。そんな苦労は感じさせないほどオルマの家族は明るく逞しい。クシがひとり増えてもそんな不自由など微塵も感じさせずに彼を歓待してくれた。

クシも種の選別を手伝いながら「今年はうまく育つように」と祈りを込めた。

口八の民は、一斉に泥レンガの家を後にした。大人はもちろん、子どもたちも生活に必要な荷物を体中にくくりつけてよろよろと重そうに歩き出す。乳飲み子を持つ母親は荷物とともに赤ん坊も布に包んで体に縛り付けている。大きい荷物を運ぶためにリヤマも数頭連れるが、ほとんどの物は人間が自分で運ばなくてはいけない。リヤマは山道に行くのが苦手なのだ。

ポコの一家も、背中に藁束やとうもろこしの種の入った袋や鍬など、それぞれが大荷物を背負って家を出た。

平原は果てしなく広い。谷に下りると言っても、どこまでも平らかな大地に溪谷があるようには思えなかった。

荷物で重くなつた体を抱えながら、口八たちは広大な平原を何日もかけて歩いていった。

何日歩き続けても、景色は相変わらず見慣れた平原ばかりで溪谷が見えてきそうな気配もなかった。ただ広く、ほかに何も見えない大地の真ん中で、何度も野宿をした。

口八たちは、疲れを癒す方法をよく知っている。

夜は焚き火を囲んで干し肉をかじりながら、昼の疲れなど感じさせないほど陽気に歌ったり踊ったりする。踊りつかれてぐっすり睡眠り、翌朝はまた元気になつて颯爽と歩き出すのだ。

しかし全員が寝入つてしまつわけではない。必ず交替で見張りが立ち、夜の平野に出没する猛獣から民を守る。長年同じ暮らしを繰り返してきた遊牧民の知恵だった。

平原の家を後にしてから何日経つたのか分からなくなる頃、ようやく山道に入つていった。荷物を抱えて山道を行くのは、平原を歩いているときより数段きつい。慣れた口八たちは山道などものともせずどんどん進んでいく。クシは息も絶え絶えに、口八の列をやつと追いかける。

やがて頂上を越えると、目的地の深い溪谷が現れた。

一列に並んだ口八たちは、慎重に溪谷を下つていく。木々などほとんど生えていない平原から、木々が鬱蒼と生い茂る山の中へ、その生活の変化はとても大きい。

溪谷の中腹あたりに、木が切られて土が均ならされた場所がいくつもあった。細い木を丈夫な蔓で組んだ小屋がそのまわりに点々と建っている。それは口八たちの雨季の住まいなのだ。

ポコが入り口を覆う伸びた枝を掃うと、ひとつの小屋に入っていた。チャキが続く。



「さあ【くしゃみ】、入って」

オルマがクシの背中を押した。

ひと季節放置されていた小屋の中はかび臭い匂いがした。細い木を組んだだけの隙間だらけ壁からは、木の枝や蔦が容赦なく侵入してきている。

ポコが家の中の枝を掃い、クシとチャキがそれを外に運び出す。オルマが腐りかけた敷き藁を手早くかき集めて外に出し、各自が背負って持ってきた新しい藁を敷き詰める。

壁や屋根に掛かる蜘蛛の巣を払うと、ようやくござっぱりとして生活できそうな空間になった。

その日は小屋の掃除で一日が終わった。夜になると、刈り取った枝を薪にして火を焚いた。それで干し肉を炙って夕食にする。ポコは小屋の隅にある甕から蓄えてあった酒を出して晩酌を始めた。

ポコはクシにも酒を勧めると、話し始めた。

「わしらはずっとこんな生活を続けている。同じ地に定住できればいいが、家畜も畑も手に入る土地というのはそうそう見つからないのだ。

食べ物もその年の気候次第。気候が悪ければどんなに大事に育てても全滅してしまうこともあり、気候が良くて虫が増えてやられてしまうこともある。

収穫が多すぎれば蓄えた分は腐らせ、ほかの家族と収穫の量が違えば、争いになることもある。

平原の暮らしはここよりは気楽だが、食べ物はこここの畑の蓄えと、リヤマの肉しかない。それにあそこには凶暴なピューマが出る。ピューマは滅多に人を襲わないというが、あの土地のピューマは人を襲うことがあるのだ。

わしの妻、この子たちの母親もピューマに襲われた」

クシは、したたか酔って潤んだ目をしているポコの横顔を見つめた。

「厳しい暮らしだ。しかし、わしらの先祖が長い間かけて編み出した生活の知恵だ。ほかの方法は考えられない。

【くしゃみ】もここに暮らす限り、いつ何が起こるかわからないと覚悟しておくんだぞ。わしは知らないが、【くしゃみ】のいた大きな街の暮らしとはだいぶ違うだろうからな」

ポコはそう言うとも木のカップに注がれた酒を一気に飲み干した。ポコの話聞いたクシは考え込んだ。

『ロハの民の暮らしを豊かにする方法は無いのだろうか』

次の日から、とうもろこしの植え付けが始まった。半年掘り返していない谷間の畑には木の根や草の根が広く深く這っていて、土を耕すには時間と労力がある。

いつもは家に籠っているチャキも出てきて手伝うが段取りが悪く、オルマに叱られてばかりいた。

そのオルマは手際が良く力もある。太い根をひとりで掘り起こして引き出しては脇にどんどん積み上げていく

「さすが、オルマだな」

クシが感心して言うと、オルマは手を休めずに声を張り上げる。

「当たり前だよ。チャキがあだから、あたしがすっかりしなかったら大変なことになる」

本当に神さまはオルマとチャキに付ける物を間違えてしまったようだ。クシはオルマの言葉を思い出して、つい噴き出した。

「けど、今年は助かった。【くしゃみ】のお蔭で仕事が倍はかどるよ」

オルマは泥だらけの顔をほころばせて笑った。どんなに勝気で男勝りでも、笑顔はあどけなさを残す少女の顔だ。

「おい【くしゃみ】。ポコの畑が終わったら、こっちも手伝っておくれよ」

向こうのほうから声をかけてきたのは隣の畑を耕すティトーだ。

「やなこった！ 【くしゃみ】はうちの家族なんだ！」

オルマは手に持った太い木の根を大きく振って、ティトーを怒鳴りつけた。

「オルマ、いいじゃないか。ここが早く終わったら手伝ってくるよ」

「ダメだ。あいつらは前の年、うちの作物が虫にやられてしまったても何も分けてくれなかったんだ。なあ、チャキ」

いつもは物静かで自分を主張することのないチャキが、ティトーたちを睨みつけて大きく頷いた。

同じ一族でありながら互いに恨みを持つ家族たちにクシは不安を

覚えた。

9、 流浪の民 (その2) (前書き)

(ご注意)

自然災害の描写があります。 敏感な方は閲覧をご遠慮ください。

9、 流浪の民 (その2)

その年の雨季はほどよく雨が降り、ほどよく日が差して、作物の育ちが良かった。

とうもろこしはオルマの背もクシの背も越えて伸びていき、見事な林を作った。

「やっぱり【くしゃみ】は神の遣いだ。今までこんなに立派に育ったことなんかないよ。今年は空腹で生きるか死ぬかの心配をしなくて済みそうだ」

オルマはとうもろこしの梢を見上げてクシの腕を握り締めた。ちょうどオルマの顔の辺りに大きなとうもろこしが頭を覗かせていた。クシがそれを取って皮を剥くと、中から艶やかな黄色い実が出てきた。

「うわぁお」

オルマが嬉しそうに声を上げた。

収穫は枝が枯れて実が乾いてからになる。しかしここまで立派に育てばもう豊作に間違いはなかった。

「楽しみだな」

オルマがとうもろこし林の間を無邪気に走り回って声を上げた。

事件は突然に起きた。

穏やかな雨季が終わろうとしていた頃、スコールが度々やってきたのだ。雨は集中的に激しく降り続き、地盤をもろくしていった。

もしも土砂が流れたら谷の中腹に暮らす口八たちは一瞬で流される危険がある。しかし彼らには、それぞれの小屋に籠って震えながらひたすら祈り続けることしか方法がなかった。

激しい雨音が不安を余計煽り立てる。

グゴゴゴ……………

雨音に混じって微かにくぐもった唸り声のようなものが聞こえてきた。

「土なだれだ！」

ポコが叫んでチャキ、オルマ、クシを急いで小屋の外に押し出すと、自分も飛び出した。

ポコは三人の背を押しやりながらぬかるんだ谷の斜面を登っていた。小屋から少し離れた高台の林に飛び込み、斜め下方に自分たちの小屋と畑を見下ろす。

ポコたちが避難した林の中には後から次々とほかの家族が飛び込んで来た。最後にテイトーの家族が走り込んできた。

テイトーたちが林に走りこんだと同時に、彼らのすぐ背後に轟音が響いた。巨大な茶色の濁流が恐ろしい勢いで斜面を流れていく。口八たちはみな叫ぶことも泣くことも忘れて呆然とその光景を眺めていた。

雨が上がり、林の中に身を屈めて体を寄せ合っていた口八たちが

ぼつぼつと立ち上がり、自分たちの住まいと畑の方を見た。

遙か向こうに見える小屋や畑はそのままの形で残っていた。しかし、彼らの目の前には幅広いのっぺりとした土の斜面が横たわっていた。

土石流が溪谷に古くから根付いていた木々とともにすぐ手前にあつた畑と小屋をも押し流してしまつたのだ。緑深い谷の斜面は、その場所だけ耕したばかりの畑のようなまっさらな空間に変わつていった。

そこにはティトー一家の所有地があつた。しかし今は跡形も無くなつていた。ティトーの畑のすぐ横にあるポコの畑も一部が流されていった。

ティトーは呆然と立ち尽くし、彼の妻はうずくまつて悲鳴のような泣き声を上げた。ティトーの小さな子どもたちも、意味は分からないが母親の泣き声に怯え、母親の体にすがりついて震えていた。

天候が落ち着くと、男たちが木の皮や蔓で丈夫な縄を作り、その先端に括りつけた棒を土の斜面の向こう側に残っている木に投げ渡した。族長の力チカリヤが張られた縄を最初に渡つて安全を確かめると、その後が続いて口八たちはひとりひとり土の斜面を渡つていった。

自分たちの家に戻つた人々はようやく安心した。しかしティトー一家には帰る家がない

ポコは敷地の一部を分けてやつた。ティトーの家族はそこに小屋を建てて身を寄せることになつた。

ポコとクシは小屋を建てるのを手伝つたが、オルマはよほど昨年のティトーの仕打ちが忘れられないらしく、一度も顔を出さなかつた。

土なだれですべてを失つたティトーはすっかりやる気を無くして



しまった。小屋が出来上がってしまうと、新しい作物を育てようともせずに毎日ポコから分けてもらった酒を飲んで寝ていた。

とうもろこしの茎や葉が黄土色になって乾き、いよいよ収穫ができるようになった。ロハたちは喜びの歌を歌いながら一斉に刈り入れを行う。どの畑もいつにない豊作だ。ポコの畑も、一部は流されたものの、残された畑で失った部分の収穫を十分補えるほどの実りを得ることができた。

収穫に忙しい人々の様子を酔っ払ったティトーは恨めしそうに眺めている。彼がポコから分けてもらったとうもろこしの酒はもうすぐ底をついてしまっただろう。そしてその後の一家の生活をどうするつもりなのか。ティトーには全くそれを憂える気配はなかった。

収穫が終わればそれらを袋に詰めて、ふたたび草原へ戻る準備をする。持ち運べる量に分けて袋に詰める筈のだが、オルマはひとつの麻袋に収穫したとうもろこしをめいっぱい詰め込んでいた。

「そんなに詰めたら麻袋が破れるよ。もう少し少なくしないと……」

クシが言うと、

「これはティトーの家にもっていくんだ」

袋の隙間を探しては器用にとうもろこしをねじ込みながら、オルマが答えた。

ティトーに恨みを持っていたオルマだったが、彼の妻と子どもたちのことは不憫に思えたのだろう。収穫した作物を分けてやることにしたのだ。クシがばんばんに詰まった麻袋を持ってやり、オルマの後を付いてティトーの小屋を訪ねた。

「あたしらもこれで半年食っていなくなっちゃならない。少いで悪いんだけど……」

ティトーの妻は何度も何度も頭を下げていた。

「余計なことをするな。畑が流されたのは当然の報いだと他の者たちもみんな思っているんだろ」

奥のほうからティトーの呻くような声が聞こえてきた。

「これはタラサにやるんだ。あんたには関係ない」

オルマはティトーの妻の顔を見ながら答えた。

「流された畑だけがわしら家族に与えられた分なのだ。それを急に神サマは取り上げなすった。何の気まぐれなのか、わしら家族を気に入らなくなっただらうよ」

呂律の回らない口調でばやいてティトーは軽く鼻を鳴らした。そんなティトーの姿をちらりと見たあと、彼の妻は大きく溜め息を吐いて申し訳なさそうに胸の前で手を組み俯いた。

「ロハは収穫を皆で分け合わないのか？ 困った人がいたら助け合うことをしないのか？」

ティトーの小屋を出たあと、クシはオルマに問いかけた。

「土地は一族皆で占ってその割り当てを決める。それは各々に豊穰

の神が分け与えてくださったものだ。それを活かすのは各々の努力次第。神から分けてもらった土地を活かせないのは自分のせいだ。それが昔からのロハのしきたりなんだ。

前の年、ティトーは同じことを言っただけであたしらを助けてくれなかった……」

「しかし、オルマたちが見舞われた虫の被害やティトーが受けた土なだれの被害は自分のせいではないだろう」

「そうだ。それは神に嫌われたのだから仕方ない。皆、毎年誰かが何かしらの被害を受け、収穫の量には必ず差が出る。どの家族も楽をして収穫を得るわけではないし、豊作といっても人に分けても余るほどの実りにはならない。苦労してほかより収穫を得た者が、いちいち不幸に見舞われた者の面倒を見ていたら損をするのは苦労した者じゃないか。働き者はいつも損をすることになる。あたしらは昨年我慢した分、今年は神から恵みを与えられた。それだけのことだ」

「……それではまた新たな恨みが生まれるではないか」

クシは、ロハたちの考え方に納得がいかなかった。

雨季は最後の嵐とともに終わりを告げ、風が少し涼しく感じられるようになった。

ロハたちは、収穫したとうもろこしで作った酒の甕だけを残し、谷を後にした。谷にやってきた時の荷物に加え、収穫した作物を抱えてまた平原に戻っていく。彼らの荷のひとつひとつが、これからのひと季節、ロハたちの命を支えることになるのだ。

谷間を上がり、小高い山を越え、リヤマの群れが待つ平原まで、

口八たちの長い旅がまた始まった。

## 10、ポコーム (その1)

10、ポコーム

口八たちは平原に戻り、また放牧の生活を始めた。

ポコは、平原の暮らしは厳しいと言うが、クシはのんびりとリヤマを追って一日を終えるこの暮らしが気に入っていた。リヤマを追いながら広い大地を走り回るオルマも、谷間の暮らしよりずっと活き活きと輝いているように見える。

豊作のお蔭で食べ物に不自由しないことが、この何も無い土地の暮らしも穏やかに楽しく感じさせてくれるのかもしれない。数粒のとうもろこしを挽いて作るパンを分け合ったり、一頭のリヤマの肉を保存して少しづつ何日かに分けて食べるという質素な食事だが、口八にとっては十分恵まれたものだった。

乾季も深くなり、草平野には刺すように冷たい風が吹きつけるようになった。空の蒼はさらに深みを増して吸い込まれそうな色をしている。雨の降らないその季節の日差しは今までよりもずっと鋭い。気温は低い、一日中外で働く口八たちは誰も、黒リヤマにも負けないほど色濃く焼けていた。

昨季はまだ口八に来たばかりで何もできなかったクシも、ようやくリヤマを追うコツが掴めてきたところだ。相変わらず厳しいオルマの指導を受けながら、放牧民としての仕事をなんとかこなせるようになってきていた。

ときどきリヤマに水を飲ませるために、クシが最初にオルマと出会った湖までリヤマたちを移動させる。たくさんのリヤマを追いな

がら移動するのは大変な作業で、行つて戻つてくるにはまるまる一日かかった。

その日も、クシとポコとオルマの三人は湖までリヤマを率いて行った。留守はチャキが守っていた。

湖から戻る途中、数頭の仔リヤマが群からはぐれてしまい、クシが探しに行くことになった。幸い仔リヤマたちは反対側の岸边でまとまって草をはんでいた。

クシは慣れない手つきで仔リヤマたち一匹ずつに縄をかけると、必死にそれを引っ張って丘の向こうに連れて行くこととする。そうすると悪戯ざかりの小悪魔たちはクシをからかうように違う方向へと駆け出した。

いくら力のある者でも一度に別方向へ引っ張られては、その場に抑えておくのが精一杯だ。大汗をかきながら縄を離すまいと全身で踏ん張り、仔リヤマたちとクシはその場で長い間縄を引き合っていた。やがて仔リヤマたちが虚しい抵抗に飽きて自らおとなしく従うまで、クシの悪戦苦闘は続いたのだった。

「思っていたより時間がかかってしまった……」

寒い季節にもかかわらず汗だくになっているクシが意地になって平静を装おうとしているのを見て、オルマは指を指して大笑いした。

「まだ放牧に慣れないのは仕方ない。段々とコツを覚えていけばいいのよ」

そう言つてポコは優しく慰めてくれたが、オルマは容赦ない言葉を浴びせる。

「いつも冷静な【くしゃみ】が、仔リヤマごときに必死になってい

るなんて、おかしいっいたらありゃしない！」

クシはオルマを睨みつけたが、オルマはお腹を抱えて涙まで流しながら笑い続けていた。

口八の集落に着いたのは、もう日が暮れた後だった。

帰り着く前に暗くなってしまったので、三人は途中で火を熾してたいまつに灯りをもした。やつのことでリヤマたちを彼らの<sup>なぐさ</sup>塹の草原に帰すと、三人はたいまつを頼りに家の方に向かった。チャキが家に灯りをもしているはずだが、どこまで行っても家の灯りは見えてこない。昇りはじめた月の明かりに助けられて目を凝らすと、暗闇に沈んだ泥レンガの建物が見えた。空気抜きの穴からも入り口からも、まったく灯りは漏れていない。

ポコが顔色を変えて走り出した。オルマとクシも続く。

家に飛び込んだポコは、たいまつで慎重に家の中を照らしていった。ポコの目にまず飛び込んできたのは真っ赤に染まった床だった。震える手でたいまつを握り、その先を照らしていく。

人の足先が見え、腿が見え、その先の上半身はとうもろこしの山に埋もれていた。

「チャキ！」

ポコの後から家に入ってきたオルマは金切り声を上げてポコを押し退け、倒れている体に駆け寄った。上半身にかぶさるとうもろこしの山を狂ったように払いのける。

クシもオルマを手伝って、必死にとうもろこしを払い除け、腿を抱えてチャキの体を引っ張り出した。チャキの腹も胸も血だらけで、顔は蒼白だ。もう生きてはいないかもしれない。オルマは泣き叫んでチャキの体を抱きかかえた。

「一体、何が？」

クシが呟くと、ポコが頭を抱えて答えた。

「ピューマだ。ピューマがチャキを襲ったんだ。しかしチャキは日が暮れたら必ず火を焚くはずだ。それなのに何故ピューマが入ってきたのか……」

ポコは頭を振りながら、何故だ何故だ……と繰り返した。彼の妻もピューマに襲われ、悪夢がまた繰り返されたのだ。ポコのシヨックは計り知れない。

クシは、オルマが抱きかかえるチャキの無残な姿を悲痛な面持ちで見ていた。しかし、ふと何かに気付き、チャキの頭の横にしゃがみ込んだ。

チャキの耳に顔を近づけ、彼の名を呼ぶ。

「チャキ、チャキ……」

何度か呼ぶうち、チャキの指先がそれに反応してぴくんと動いた。

「生きているぞ！」

クシが叫ぶと、ポコとオルマが驚きの声を上げた。三人で手を持つたり体をさすったりして何度も呼びかける。チャキの体はときどきそれに応えてピクピクと動いた。傷だらけだが、よく見るとどの傷も急所を外れているようだ。

「良かった！ チャキ！」



オルマの涙が嬉し涙に変わった。手早く自分の服の裾を裂いてチャキの傷の手当てをする。

「ピューマが暴れたときに積み上げてあったとうもろこしの袋から中身が落ちてきたんだ。ピューマはとうもろこしに埋もれてしまったチャキをそれ以上襲うことができず、諦めて逃げていったんだろ  
う」

ポコがホツとした顔で言った。

「しかし……チャキの血の匂いを覚えたピューマはまたやってくるかもしれない。ピューマを退治しなければ危険だ」

クシが入り口の外に広がる闇の平原を睨んだ。

「ピューマを退治するなんて、そんなこと無理だよ」

チャキを介抱しながら、オルマが溜め息をついた。

「ピューマはチャキの血を付けて逃げていった。夜が明ければ血の跡を辿ってピューマの罫ひんを探し当てることができるかもしれない」

「罫を探し当てたって、どうやってピューマを倒すんだい！」

オルマが顔を上げ、クシを睨んで聞き返した。

「私が行く。私はこれでも故郷で戦士としての訓練を積んできた。今ならチャキが与えた傷でピューマは弱っているはずだ。勝てるかもしれない」

そう言うと、チャキが埋もれていたとうもろこしの山の下から、血だらけの石斧を見つけて引っぱり出した。それはクシがクスコから唯一持ってきた物だが、ロハの村では使う機会がなかったため、普段は竈の横に置いてあったのだ。

チャキは咄嗟にその斧を掴んでピューマに抵抗したのだろう。斧の刃には血がこびりついていた。

「ダメだ、【くしゃみ】！ 人間がピューマに敵うはずはない。しかも奴は傷を負っているのだ。気が立ってさらに凶暴になっている。【くしゃみ】がいくら訓練を積んでいたとしても勝てるわけがない」

ポコが必死で止める。

「随分と見くびってくれるな、ポコ。私は武術の腕には自信がある」

クシは笑って見せた。しかしその後で真顔になって続けた。

「それに……………」。

実は、私は故郷で死罪に等しい罪を犯したのだ。しかし運良く故郷を追われるだけで済んだ。かろうじて死罪を免れたこの身なのだ。万一ピューマに敵わなかったとしても、その命を、助けてくれたロハの為に捧げられるなら本望だ」

「莫迦なことを言うんじゃないよ、【くしゃみ】！

あなたは大事な家族なんだよ。ピューマが襲ってきたら、皆で一緒に戦えばいいじゃないか！」

オルマがクシを怒鳴りつけた。

「オルマ、万一の話だよ。私は命を粗末に考えているわけではない。

勝てる自信があるのだ。オルマまで私を見くびるのか？」

「だって【くしゃみ】。相手は獣の中の王なんだ。相手にしようなんて気が狂っているとしたか思えない」

「獣の王でも獣は獣だ。人間には知恵がある」

クシはこめかみに人差し指を立てて得意気な顔をして見せた。

本当はクシに自信などなかった。逆に恐ろしくて息が詰まりそうだった。戦で敵を倒したこともない自分に凶暴な獣など倒せるのだろうか。

しかし、いったんその味を覚えたチャキの血を求めて、獣はまたやってくるに違いない。そうなればチャキだけでなく、オルマもポコも、自分も襲われるだろう。

命の恩人を救うために投げ出す命なら惜しくはない。クシは無理に自信満々の様子を装っていたのだ。

どんなに止めても聞く様子のないクシに、オルマ親子はそれ以上何も言うことはできなかった。

「ポコ、頼みがある。これくらいの石と縄をできるだけ多く集めてくれ」

クシは入り口に転がっていた握り拳ほどの大きさの丸い石を拾ってポコに見せた。

「それと、リヤマの皮を厚く巻いて腕当てを作ってほしい」

「そんなことはお安い御用だが……」

(本当に行くつもりなのか)という言葉の代わりに、ポコは訴えるような目をクシに向けた。

「父さん、【くしゃみ】を信じよう。あたしに協力できることがあるなら、できる限りやってやるっよ」

溜め息をつきながらオルマが咳くように言った。

ポコが集めてきた石と縄で、夜が明けるまで三人はポーラを作った。

「これをどうするんだい？」

クシに言われるままに作ったはいいが、その用途に見当がつかず、オルマはそれを顔の前に持ち上げて、垂れ下がった石がぶつかり合う音を聞いている。

「回して勢いをつけて投げ、動物の首や脚に絡ませて倒す」

言いながらクシは軽くそれを回し、部屋の隅に立て掛けられた鍬の柄めがけて投げた。ほんの少し回転させただけが、ポーラは勢いよく飛んでいき、柄に固く巻きついた。オルマがそれをほどこうとしたが、びくともしない。

「へえ、【くしゃみ】は頭がいいな。これなら勝てる自信があるはずだ！」

オルマはポーラの威力に感心して、これならクシがなんとかしてくれるだろうと信用した。

『キヌア、獣に勝つにはどうしたらいい……』

縄に石を括りつけながら、クシは心の中の師に問いかけた。

全神経を研ぎ澄ませて自分の周りの空気を読み取ることが大切なのです

突然脳裏に、鮮やかにキヌアの声が蘇ってきた。

『キヌア、どうか私とともに戦ってくれ』

今、クシが頼れるのは、記憶の中のキヌアの教えだけだった。

夜が白々と明けるころ、クシは泥レンガの家を出た。

かち合って音がしないようにボートを束ねて腰に結わえ付け、たすき掛けにした縄の背中側に斧を挿し、両腕にはリヤマの皮を幾重にも重ねた丈夫な腕当てを巻いた。

「【くしゃみ】、必ず無事に帰ってくるんだぞ！ 敵わないと思ったらすぐに諦めて逃げてくるんだぞ！」

オルマは心配のあまり、クシの姿が小さくなるまで大声でいろいろと呼びかけていたが、声が届かないくらいに離れてしまうと、いつまでも勢いよく手を振って見送っていた。

土の上には既に乾いて黒ずんだ血の跡が点々と付いている。ピュームの足跡も微かに残っている。

その日は風が穏やかだったのが幸いだ。黒い染みは風に運ばれた土に覆い隠されることなく、はるか遠くまでピューマが辿った道を示してくれていた。

血の跡が小さく薄くなってきたとき、小高い丘に突き当たった。丘を上り切り、その先を見下ろすと干上がった川の跡が見えた。水はないが、湿った土が蛇行する流れを描いており、それに沿って背の低い木がぼつぼつと生えている。

丘の上に身を潜めて慎重にその周辺に視線を走らせる。すると大きめの繁みの陰から動物の脚らしき物が覗いているのが見えた。

「あいつだ」

クシはそれがチャキを襲ったピューマであることを察した。黒い染みは微かではあるが、丘を越えてその繁みの手前まで続いていた。

視線をそこに向けたまま、ゆっくりと腰に手をやり、ポーラを留めている縄をほどく。そしてそのひとつを取り出して軽く放ると、ポーラは半円を描いて繁みの前にすんと落ちた。

落ちてきたポーラに誘われるように、繁みの中から琥珀色の丸い頭が覗いた。突然目の前に降ってきた謎の敵の正体を確かめようと盛んに鼻を鳴らしながら近寄っていく。続いて現れた頭に似つかわしくないどっしりと大きな体には、ところどころ肉が裂けた跡があり、乾いた血がこびり付いていた。

チャキが必死に負わせた傷だ。しかしその傷がピューマの頑丈な体を弱らせている様子は見られない。

クシは二つ目のポーラを取り出し、今度はそれを勢いよく回して力いっぱい放った。ポーラは高速で回りながら空を切り、ピューマの後ろ足を捉え、絡みついた。

猛獣は敵の奇襲を察して、素早くポーラが放たれた方へ向き直り、

突進してきた。その脚を捕らえていた筈のポーラは、強靱な後ろ足を完全に締め上げることはできておらず、虚しくほどけてしまった。クシは向かってくるピューマの眉間を狙って再びポーラを投げつけ、すぐさま斧を構える。

ポーラを眉間に浴びたピューマは一瞬たじろいだが、さらに獯猛さを増して一気にクシに飛び掛ってきた。

クシはリヤマの皮が厚く巻かれた左腕を突き出し、ピューマの牙を食い止めた。ピューマはクシの腕に喰らいついたまま、頭を左右に激しく揺すった。クシの腕をちぎり取ろうとしているのだ。クシは喰いつかれた腕と両脚に力を入れてピューマの動きに抵抗する。そしてもう片方の腕で、ピューマの首に向かって斧を何度も振り下ろした。

首の苦痛に耐えかねたピューマはクシの腕から口を離して後ろに飛び退いたが、再びクシに飛び掛ろうと身を屈めた。

クシはピューマの動きを慎重に観察しながら、斧を握る反対側の手を腰のポーラにかけ、石の部分を持って引き抜いた。

ピューマは低く唸ると前脚で地面を引っ掻いた。

ピューマが牙をむき出して飛び上がった瞬間、クシはピューマの口の中めがけてポーラの石をまっすぐに投げ入れた。石がピューマの喉にすっぽりと納まった。そして飛び上がったピューマの腹の下に素早く転がり込み、そこに一撃を加える。

ピューマはクシの身体を飛び越えてその向こうに仰向けに転がったが、すぐさま身を翻して起き上がった。

しかしすぐに襲い掛かってくる気配がない。むせながら、しきりに頭を振っている。クシの投げ入れた石が喉を塞いでいるのだ。

その隙をクシは見逃さなかった。真正面から向かっていくと、ピューマの脳天に斧を振り下ろした。

気付いて獣はクシに飛び掛ろうと前後の脚をぐっと伸ばしたが、クシの斧が獣の額を打ち砕くのが僅かに速く、脚を突っ張ったまま

ドツと横に倒れた。

クシは気を失った獣の身体に跨り、その喉をかき切つてとどめを刺した。ピューマが再び起き上がることはなかった。

戦いが終わり、クシはしばらく呆然と獣の遺骸を見つめていた。

#### 獣の王に勝った

ふと我に返つて自分の体を見回すと、流れ出る自分の血と獣の血で全身が赤い斑模様になっている。

うまくかわしたと思つていたピューマの爪は、クシの体をあちこち傷つけていた。

腕に喰いついたピューマの牙は厚いリヤマの皮を貫いて腕の肉にまで達していた。ボロボロになつた腕当ての下から血が後から後から滲み出てきて、地面にぼたぼたと滴り落ちた。

それをぼんやりと見つめているうちに、クシの意識は薄れていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5493w/>

---

皇子クシ

2011年10月26日11時07分発行